

令和5年度 第3回横須賀市学力向上推進委員会 議事録

- 1 日時 令和5年11月15日(水) 13時00分から16時30分まで
- 2 場所 横須賀市立桜小学校・横須賀市立坂本中学校
- 3 出席委員
笠原委員・櫻井委員・市川委員・庭田委員・吉田委員・東委員
- 4 事務局
学校教育課教育指導課 鈴木課長 石橋主査指導主事 渡辺主査指導主事
北井指導主事
- 5 傍聴者 なし
- 6 会議内容
(1) 授業参観
事務局から、次のとおり授業参観の趣旨を説明し、桜小学校長から学校運営方針の説明を受けた後、桜小学校(3クラス)および坂本中学校(3クラス)の授業参観を行った。

■事務局

授業参観の趣旨は横須賀市学力向上推進プラン目標1「学び合う集団の育成」に向け、自己肯定感の向上につながるように教師が児童生徒とどのように関わっているか、自分のことを大切な存在だと実感できるように教師がどのように声をかけているかを観ていただきたい。また、児童生徒がお互いを認め合い仲間と協働しているような場면을観つけていただきたい。

その他に、本日の参観は小学校から中学校へと移動する。小学校から中学校へとつながっている点、共通点や異なる点なども観つけていただきながら参観いただきたい。

■桜小学校長

本校の学校教育目標は「気付き、考え、行動できる子」である。グランドデザインの中では「確かな学力の育成」を重点の一つ目において、校内研究を中心に取組を進めている。

校内研究は「互いを認め合い 学びあう学級づくり」をテーマにして、授業の中で「わかる」「できる」「生かす」という児童の姿を目指して研究している。そ

のために、3つの手立てがある。一つ目は、アンケートや学校独自の学力調査を利用して子どもたちの実態を把握していること。二つ目は、既習事項の掲示、できたことの価値づけを行う「できた・わかった・いかせた」が実感できる授業づくりである。三つ目は、他学年の担任がTTの形で1時間ずつ全クラスに入るサポート体制の工夫である。このように、子どもたちの支援と実態把握に努めている。本市の学力向上推進プランに沿った取組であり、本校でできることから取組を進めている。

(2) 協議①

事務局が協議の趣旨を説明した後、参観した授業や学校の様子について、両学校長、授業を行った小学校教員3名を交えて協議を行った。

■事務局

参観の趣旨は先に述べた通りである。委員には、これまでの学力向上推進委員会で議論されてきたことなどを踏まえて話をしていきたい。

学校長および授業をした教員には、学び合う集団の育成に向けて、本日の授業やこれまでの授業で意識していたことについてお話いただきたい。見取った子どもの姿と授業者である教員の意図をつなげて協議できれば、学び合う集団の育成に向けて取り組むべきことが見えてくると考える。

■委員長

「学び合う集団の育成」について、参観した授業の中で、教員の関わりにより、子どもたちが自己肯定を感じていた場面があったと思う。その時に、教員が意図をもって子どもたちと関わり合おうとしていた場面や、そのような関わりを通して子どもたち同士が相互に褒め合いや認め合う態度が育成されていたような場面など、いろいろな場面が観られたのではないかと見取った場面を話していただくとともに、参加した教員からは日常的な関わり、組織的な関わり、継続している日ごろの取組などについてお話いただきたい。

■委員

4年生の算数、式の計算の工夫について考える場面を観させていただいた。子どもたちが自分たちで工夫を重ね、友達の考えを聞く場面があった。自分と違う考え方に「すごい」という声があがっていた。自分と違う考え方を知り、視野を広げる様子は、子どもたちが生き生きしていると感じた。

学び方としては、ペアトークが多くあった。その中で、椅子を近づけて、向かい合って話し合う様子が良かった。学級経営の中で日ごろから指導している成果だと思う。その土台があつてこそ、「すごい」という声や顔を近づけて話し合

う場面が観られたのだと思う。

■委員

同じ授業を観せていただいた。入ったとたんに温かい雰囲気を感じた。ペア学習をする場面が多い。自信のなさそうな子も、友達と相談するとほっとしているように観えた。授業の中で教員の話の聴き、お互いに話し合い、考えたことをわかりやすく伝え合い、友達の出した疑問にもみんなで考える様子が観られた。友達の発言を皆がよく聴いている。発表後の拍手が自然に発生していたこともよかった。

教室環境の部分では、掲示物がきれいだった。クラス写真がたくさんあり、月ごとに子どもたちの成長が感じられるのが良いと思った。

■委員

5年生と6年生の授業を参観させていただいた。5年生は学び合う集団になっていると感じた。教員と子どもたちの受け答え、子どもたちのやりとりを教員がつながけていくという形が日常からできていると感じた。

学習の中で「自分の成長を振り返る」というめあてが確認され、「あの時、成長できた」と子どもたちが発言していた。ほとんどの子が、お互いにその言葉を笑顔で受け止め、教員も笑顔で明るい言葉を返していた。中にはマイナスの言葉、マイナスの経験も出てきたが、それを教員がうまく転換して「それも成長だね」と価値づけされ、マイナスをプラスに変えていた。それが日々繰り返されていくことで学んでいく集団が作られていると感じた。

自分の成長につながった部分で、一人の男の子が「振り返りが書けるようになった」という発言をした。振り返ることそのものが自己の成長を実感することにつながる。その子の発言を肯定的に聴く周りの雰囲気から、クラスの多くの子が、振り返りをする意義を分かっていることが伝わってきた。「振り返り」を「気づく」につなぐか「考える」につなぐかは場面によって違うと思うが、「振り返り」ことが定着していることが伝わる授業を観せていただいた。

6年生は、歴史の学習で戦国時代から全国統一に向かう中で、信長と秀吉のどちらが大きな働きをしたのかディスカッションしようという授業だった。

そこで、学びあう学習にするためにはどうすればよいのかという疑問をもった。歴史好きな子もいるので、どうしても個人の知識量に差がある。そうなるとうちでも一方通行になる場面がでてくる。それをどのように打開するか。例えば情報共有する段階で教員側がしっかりとテーマを与え、あまりに広い範囲でのフリートークにならないようにする手立てが必要だと感じた。

両学年とも学級経営の部分では、こういうクラスを作っていこう、これまでどのような積み重ねがあった、ということ教室掲示で見えるようにしていた。小

学生は視覚で理解する部分が多い。そこが丁寧になされていると感じた。

桜小学校として、掲示物を使って教室環境や学級経営をしていくスキルが、学年間や経験年数の違う教員同士で伝達されているのか、また、そういう機会があるのかを、この後お聴きしたい。

■委員長

小学校についてほかに何かあるか。

■委員

私も5年生と6年生の授業を観せていただいた。学び合う集団として、かなり完成しているという印象を受けた。

授業中に「ワイワイタイム」でしゃべってみようという時間があった。その時の教員と子どもたち、また、子どもたち同士のリアクションがすごく良かった。目の前にいた3人グループは、「そうだよね」「ああ、そうそう」などお互いの意見に同意するリアクションがあった。お互いが安心して、話ができているように観えた。また全体に戻して成長できた部分について話し合う時も、子どもたちのちょっとした言葉に「それあったな」「自分にはなかったな」など、みんなが発言した子の意見を受け止めていることが素晴らしいと思った。

6年生は、ディスカッションする子のしゃべり方が素晴らしかった。6年生が、原稿がなく、あれだけしゃべれたことである。聞き手の子は教員の板書をメモしながら「今川義元が……」という話が出た時に、素早く教科書を開いた子がいた。話していることを聞いて、自分でも思い返して教科書をめくる様子が観えた。

また、小さなことかもしれないが、座る席がないと困っていた子にみんなが「ここだよ」と言ってあげたり、「借りるね」と友達に一言かけていたり、友達に借りた教科書を、見ていたページが分からなくなならないように自分の鉛筆を挟んであげていたり、授業とは少し違うかもしれないが、誰かのために何かをする、人の状況を見て自分にできることはやってあげるということがクラスの中で自然とできていて、とても良いクラスだと思った。

■委員

保護者の立場で、去年から委員を務め、このように授業参観させていただいている。去年はいくつか気になる点があった。グループで学ぶと、グループによっては、バランスが良くない部分もあるのではないかと、教員の力量によるが、それを整えていくのが大変だろうと思ったことである。

また、班内で発言できる子とできない子の差もある。班がどう作られているのか、班のメンバーは固定されているのかなども保護者の立場として気になった。班を入れ替えるならどのくらいの期間なのかなども。

しかし、今日観た授業は、昨年観た授業よりもグループ学習の問題点が観えなかった。教員の指導力が上がっているのだと思う。本日の授業は、友達同士や教員の反応が温かく、安心して学びあっていた。発言も自由で、思ったことをちゃんと発言できていた。発言を否定しないことの良さも強く感じられた。友達の発言内容を否定せず、プラスに言い換えてあげる場面が観られた。学び合う集団として進化していることを感じた。

4年生の算数は、複数の答えを考えさせるポイントがあった。難しいことにも挑戦したいという探究心が生まれていると感じた。

5年生では、一つの意見に対して関連する意見が出てきて、どんどん繋げていき、クラス全体で学ぼう、答えを見つけていこうとする姿勢がとても面白かった。

■委員長

小学校3クラスの授業を観させていただいた中から、学び合う集団の育成に向けてそれぞれの委員が感じたことをお話しいただいた。今の話を聞いて、桜小学校教員の皆さんが、学び合う集団を育成するために日ごろから心がけていること、今日の授業の中でも特に観てほしかった部分などがあればお話ししていただきたい。

■桜小学校教員（4年生担任）

今日の子どもたちの反応は私の予想とかなり違うものだったので、自分の中で驚きがある。

普段から自信がない子、授業でもあまり手が挙がらない、分かっているのに答える勇気のない子が4月当初は多かった。そのため、どういうふうに学び合う集団にしていくかを日々考えて授業づくりをしてきている。

自信のない子は、一人というのは不安。自分の答えが合っているのか不安を感じてしまう子は多い。まずその考えの方向性が合っているのか確かめたい気持ち強い。

授業では自分の考えをペアなどの少人数で話し合う場を作っている。その中でアドバイスをもらったり、ひらめいたりしたら取り入れていいと指導している。自分の考えだけでなく、友達の考えも取り入れて自分の意見にしている。今日はペアで発表させた。まだ、一人で前に出て発表するということは抵抗がある子もいる。ペアだと子どもたちも自信が持てるので、ペアで発表ができるようにしている。自分で考えた時は分からなくても、友達の話を聞いたり、全体でみんなの話を聞いたりする中で、最終的に何か得られればいいと思っている。自分だけで解決するのではなく、クラスみんなで課題に対して達成感を得られればいいと普段から思っている。

ふだんは自信のなさそうな子たちが、今日は自分から手を挙げたり、振り返り

の提出のときに「こんなにできたよ」と言いに来てくれたりしたことが、私の中での驚きだった。

■委員長

今日は参観があることを児童たちに伝えたのか。

■桜小学校教員（4年生担任）

昨日の帰りに「明日の5時間目はお客様が来るけれど、みんなはいつもどおりで大丈夫だよ」と伝えた。

■委員長

そのときの児童たちの反応はどうだったか。

■桜小学校教員（4年生担任）

その時は驚いていた。

授業の導入を観た方はわかると思うが、私はいつもその時間に目指す姿を、子ども向けの俳句にして、黒板に書くようにしている。そこに今日はペアと協力して解決ということを書いた。子どもたちは、今日はお客様が来るけれど、自分だけじゃなくてペアで取り組めるという安心感があったのだと思う。

■委員長

5年生の授業者は、どのように今日の授業を考えられたか。また日頃の学級経営についても伺いたい。

■桜小学校教員（5年生担任）

日曜、月曜とキャンプで、昨日の火曜日は代休だった。そのため、今日はキャンプ後初めての登校日だった。このようなタイミングだったので、どのような授業がいいか考えた時に、キャンプ後のこれまでの成長を振り返る時間にして、子どもたちが語っていく授業にしようと思った。

1時間目はキャンプに焦点を当てた振り返りにした。そうしないと、参観していただいた5時間目が、子どもたちの中でキャンプのことを話したいという思いをもったままになってしまい、これまでの成長に話がおよばないと思ったからである。

私の課題の与え方にも問題があったと思うが、前半は広く浅くで、具体的なエピソードがあまり出てこなかった。反省はあるが、一生懸命発言している子がいて良かった。1ヵ月の間に運動会、キャンプと2つの大きな行事を乗り越える中で、子どもたち同士が互いに苦手なこともあるけれど、認めていける雰囲気を受

業以外で作ることができている。

最近はどの授業をやっても同じような雰囲気がある。わからないことがあっても恥ずかしくない。

子どもたちには、「挑戦」は「成長」か「成功」しかないと話している。本当は挑戦すると失敗か成功かと考えてしまうが、「成長」か「成功」かだと4月に話した。その時はきょとんとして、先生は何を言っているのだろう、という感じだったが、大きな行事を乗り越えて、自分たちが実体験をする中で、その言葉を実感していった。今日の授業でも何人もの子が、その言葉を忘れたくないと言ってくれた。「良い言葉」も実体験が伴うと、自分の気持ちとつながって、価値のある大切な言葉になると思った。

4月はとてもシャイな子が多かった。発言も少なく、リアクションもなかった。聞いているのか聞いていないのかわからない子が多かった。最初に聞く姿勢、聞き方について話した。聞く時は目を見てうなずきながら聞くと安心できることや、発言できない時は隣同士で語り合う「ワイワイタイム」で聞いているだけでも参加していることになる、学びも深まることなどを伝えた。そして、先生は発言した子以外の考えは見取れないから、振り返りを頑張って書こうと伝えた。

最初の総合的な学習の時間では振り返りがあまりにも書けなかったので、行数を指定することもあった。最初は書けなかった子にも視点を与え、書き方のコツを粘り強く指導していくとだんだん書けるようになってきた。

振り返りに価値を感じているのは、みんなが振り返りを書けるようになってからだと思う。今では10行では足りないと言い、宿題で持って帰ると10ページくらい書いてくるような子もいる。少しずつステップアップしながら自信を深めていき、お互いの振り返りを見せあって、切磋琢磨してがんばろうという姿も観える。そのようなステップを踏みながら、学級経営をしている。

■委員長

6年生の授業者は、どのように今日の授業を考えられたか。また日頃の学級経営についても伺いたい。

■桜小学校教員（6年生担任）

学級経営の中で今年心がけているのは「受け入れる」ということ。とにかくいろいろな子がいる。みんな得意なこと、不得意なことが違う。できないことを指摘するのではなく、その子ができていること、できたことを認めていくことを大切にしている。できないことを責めるのではなく、できないことを受け入れていこうとしている。

今日の授業で行ったディスカッションは普段はあまり行ったことはない。調べたことの発表はよく行っているが、調べたことを使って議論するのは今日が

初めてだった。発言者が偏ってしまったと感じているが、授業の最後に自分の意見をグループで話し合わせたら、発言する子が増えていた。みんなの前では言えないけれど、小さなグループだったら話していこう、伝えていこうという姿が観えた。ディスカッションとして物足りない部分はあったかもしれないが、発言した子たちの内容を生かして、自分の意見を考えることができていたので、話し合いとしては良かったと思う。

■委員長

桜小学校として、掲示物や教師側のスキルを校内で伝達しあう取組、日常から気を付けていること、また、3人の教員の話聞いて、学校経営の視点から「学び合う集団」について学校長から一言お願いしたい。

■桜小学校長

本校には一人一人を大切にしていこうという土台がある。先ほど校内研究についてお話しさせていただいた通り、一人ひとりの児童理解にはげむことと、子どもたちが安心できる学習集団を作っていこうという取組がある。全クラスでアンケートを年数回行い、子どもたちの状況把握に努め、学校独自の学力調査を実施・分析して子どもたちの学習に対する状況も把握するように努めている。

校内研究の中では全員で協議する場を作り、授業の中で観られた子どもの様子だけでなく、自分のクラスの実践、改善のための手立てなど、ざっくばらんに話し合う場としている。教員同士が協働して学び合う土台ができている。

困ったことが起きた時には組織で動くことを意識している。児童指導部、支援コーディネーター、学年は常に一緒に解決を図ることができている。何か桜小学校の教員の中で補足はあるか。

■桜小学校教員（4年生担任）

校内研究では算数を中心に研究している。その一環で、空き時間の教員が1時間だけほかのクラスの算数の補助に入り、学ぶ時間を作っている。普段あまり観ることができない他の教員の授業を観て、指導を学ぶことができる。そのような機会があまりないので、掲示物や学級経営の仕方も参考にできる貴重な場にもなっている。

■桜小学校長

この他に、ユニバーサルデザインの視点で授業や学習環境について記した冊子を作り、それを全教員で確認している。

■委員長

桜小学校の皆さんに感謝申し上げたい。次に中学の授業について感想をいただきたい。

■委員

中学校では、2年生の理科を観た。一日の天気の変化のグラフを見て、その時刻が晴れなのかを生徒が考える場面があった。晴れと雨の判断だけならば小学校4年生でもやっているが、小4の場合は「気温」だけを見る。中2になるとそこに「湿度」「気圧」が入る。系統性のある学びとしてレベルアップした様子が観られた。

一人の生徒が「小学校の時に近いことを学んだ」と言った。他の子がその発言に反応しなかったのは残念だったが、これまでに学んだことを、教員が意識して授業づくりをすることが、学力向上につながるのではないかと思った。

私自身はICT端末が導入された時には管理職となっていたので、授業でICT端末を使ったことがない。本日授業されていた教員はジャムボードをうまく使っていた。ただ共有するだけなら、プリントを大きく印刷してグループを作ってという昔ながらの方法でもできる。だが、ジャムボードならグラフを動かして相似形を見つけることなどもできる。このような使い方があるのかという気付きがあり、良いものを観させていただいた。

一点気になったのは、学びを記録していくことである。授業の中で子どもたちは「ここで気圧が下がっているけど湿度がおかしい」といった課題解決につながる発言をしていた。せっかくグループを作るのなら、役割分担として記録者など一人一役を設けたい。そうすればさらに自分事として学ぶことができ、学びの記録を残す手立てがとれたかと思う。

その他は1年生の社会の授業を観た。教員が「自分で学びたいテーマは自分で決めていく」と言っていた。このような声掛けを積み重ね、3年間で自己決定、判断、解決のスキルを学んでいく。この素地を1年生の段階から作っていると感じた。

■委員

同じく理科と歴史の授業を観た。本校も4人班学習をしているので近いものを感じた。話し合うだけではなく、自分で考えてから相手の考えを聞くことが大切であると感じた。また、坂本中はICT端末をうまく活用していると感じた。生徒がその特徴を理解している。生徒が理解しているから取組が早い、何をしていくかが明確になっている。

社会では、自分が調べたことをぼそっとつぶやき、生徒同士がそれをうまく拾っていた。小学校から互いの話をしっかりと聴くことから始まっていて、誰かが発言したときには耳を傾ける素地があるからだろう。4人班で各々が集中して

いるのに、誰かが「鎌倉時代と室町時代はどちらも武士の時代だよ」とつぶやくと、他の3人が「ああ、それ」と同意をし、意見を書き出し、すぐにまた静かになり、それぞれが調べ学習に戻る。小学校の授業では、みんなの顔をみながら話し合いをしていたのが、中学校では班になりながらも個の学びの時間がある話し合いに変化していくのが分かった。小中のつながりとその必要性がよく分かった。特に中学校は小学校でどんな学びをしていたのか、それを分かって授業をしていかないといけないと感じた。

今日観た授業では、小学校も中学校も黒板の真ん中に「めあて」を書いていた。中学校では左下に「今日の流れ」としてポイントが書いてあった。めあての立て方、黒板デザインについては学校で統一されているのか気になった。

■委員

DX化が素晴らしいと思った。スプレッドシートで共有して書き込んでいくことを中学生からやっていることに驚いた。私は会社を経営しているので、自分の会社の社員はこのようなことができるのか心配になった。

小学校、中学校の二つを観て、成長するごとに班学習で進める子と進めない子の幅が広がっていくように感じた。発言せず、何をしてよいか分からなくなってしまっている子が中学校では何人かいた。

去年の学力向上推進委員会で授業を観たときに、班の中で間違った意見を正しい意見かのように議論し、時間が終わってしまったグループがあった。そのグループは特に教員からのフォローもなく終わってしまった。もしかしたらどこかで修正があるのかもしれないが、そのまま家に帰ってしまうことを心配した。

今回すごいと思ったのは、DX化によりプロセスが見えていること。ジャムボードもそう。今日の時間はそこで終わっているが、導き方がジャムボードに残っている。もし間違った導き方をしても教員が把握できているのだと、去年までもやもやしていたことがすっきりした。

■委員

中学1年生と2年生の理科を観た。1年生は実験の部分しか観られなかったが、実験の際に協力している様子を観ることができた。実験の考察で、子どもたちが撮った写真そのものを使っていた。教員の広い度量、教材研究の深さを感じた。教科書の資料を使うのではなく、自分の経験に基づいたものを資料とすることで、興味関心が高まるのだと思った。

2年生の理科は各班の答えを確認する時の教員の声かけが良かった。正解することが目的ではなく、学習内容をどう理解していくかが大切。中学校は教科担任制だから、高い視点で物事を観られている。専門性の高さがあるからだと感じた。

また、中学校で観た2クラスの教員は、どちらも言葉が優しい。子どもたちにとって安心感がある。分からないことも素直に聴きやすい。壁が良い意味でない。そういうことも学びにつながっている。

■委員

中学1年生の授業は時間がなくてあまり観られなかったが、仲良く全員が工夫し、取り残されている子もなく、非常に良い集団だと思った。2年生の授業も答え合わせの場面しか観られなかったが、正解して全員が喜んでいて。教員が小学校の時にしっかり学んでいたんだねと価値づけていた。小学校の学びを中学校でうまく使う、既習を繰り返すことは大事だと思った。

■委員長

坂本中学校長はそれぞれの教員の授業を日常的にご覧になっていると思う。それらを踏まえ、坂本中学校で学び合う集団を作っていくうえで、日頃から教員に話していることがあれば教えていただきたい。

■坂本中学校長

本校は横須賀市から助成を受け、ICT端末の効果的な活用について3年間フロンティア研究を行ってきた。研究は今年で3年目。1年目はとにかく使わせることにした。様々なサイトに行ってしまうなど、失敗しても良いから、とにかく使わせてみた。ICT端末の活用には、成長の過程で「やらかし期」というものがあるが、最終的には落ち着くということを経験した。横浜国立大学の教授から学んだ。使用についても成長段階があるという、根拠となる考え方を聞いたので、安心して取り組めた。そうすると、生徒がどんどんICT端末を活用するようになっていった。

日頃から教員に言っていることは、考えることができる生徒を育成すること。校則についても考えるし、教員の中で迷ったら生徒に考えさせてと言っている。自分たちで考え、自分たちで実行することを、学校全体で心がけている。

他には自分と友達を大事にすること。私は4月に、3年生全員と面談する。生徒に聞くのが一番早い。生徒に聞くと、この学校がどういう学校なのか一番よく分かる。質問事項の一つに「坂本中はどんな学校か」というものがある。「仲間を大事にする」「先生たちと距離が近い、なんでも話せる」「個性を大事にしている」という声を聞いた。そういう取組をしてきたからだと思う。小さい小学校から集まって来ているので、人を大事にすることを知っていると思う。3クラスしかないのに4校から集まっている中学校はそれほどない。十数人の1クラスしかいなかった小学校から集まってきて、クラス替えも広い校舎も初めて。友達を大事にすることを基本的に知っていて、大人を信じている。そういう環境がそも

そもあるので、学び合う集団ができやすい。中学校に来る頃には大人を信じているし、仲間を信じることを知っているので、指導がしやすい。

中学1年生の学力も高く、やりがいのある子どもたちを預らせていただいている。中学校としてはそれを衰退させないようにしていきたい。

■委員長

先の委員の質問にあった「めあて」の書き方や黒板のデザインについて、決まりなどはあるのか。

■桜小学校長

特に決めていることはない。

■坂本中学校長

特にはないが、「めあて」をたてることと授業の流れをつくることは教員に伝えている。いっどこで何をすることが分かるようにしておくよう指導している。

■委員長

他に、言い残していることはあるか。

■坂本中学校長

本校では、学習意欲とICT端末の使用に、アンケート結果から相関があるという分析結果が出ている。特に学習意欲と「自分に合ったスピードで学習できる」という質問に相関がある。ICT端末で自分に合ったスピードで学習でき、ポートフォリオとして自分の学習の過程が見えて振り返ることができ、黒板も写真に撮れるので見直しやすい、ということ等が成果としてある。そのあたりが、子どもたちの学習意欲に関係している。また、学習状況調査で全ての問題で無回答がゼロだった。最後まで粘り強く取り組むことにもつながっていると思う。

■委員長

私も参観させていただいたので、まとめたい。両校とも安心感、温かさがあり、とてもきれいで環境が整えられている。子どもたちが安心して学校で学べる。

前回我々の話し合いで出てきた言葉に、心理的安全性というものがある。これは教員にも大事だし、子どもにとっても大事。失敗を恐れず、間違ってもいいということが日常的に積み重なっていき、子どもたちが教員を信頼している。教員も子どもたちを信頼しているという関係性の中で授業ができていることが大きい。

小学校も中学校も教員が子どもたちをよく観ている。子どもたちの日常のエ

ピソードが授業の中で語られている。両校ともアンケートなどの客観的なデータを上手に使っていると同時に、アナログなものも大事にしている。どちらかに偏らず、バランスが良い。

中学校は若手の教員の授業を拝見した。小学校は中堅からベテランの教員だった。小学校の教員は子どもの発達段階をよく理解し、子どもたちに接していた。中学校では若手の教員であることもあり、子どもの発達段階についてもう少しアプローチが必要と感じた。しかし、これは小学校と中学校をつなげて参観したからこそ感じられたことである。

学校内部のOJTが大事になる。若手の教員は先輩教員がどのように指導しているかを観ることが大切である。ベテランの教員たちも日常で自分の授業を観ることはできない。自分たちがどういうふうに授業をしているかは分からない。しかし、他の教員の授業を観ることで自分に足りないところが観え、良いところを取り込むことができる。こういう学び合う雰囲気は校内にできていることが、共通した点として観ることができた。

示唆に富んだ授業を観られてありがたい時間だった。我々にとって非常に貴重な時間だった。

(3) 協議②

各校の教員が退席した後、本日の授業参観と協議①の内容を踏まえ、各学校において学び合う集団を育成していくために必要なことについての協議を行った。

■委員長

学力向上推進委員会の2回目までに話してきた内容は、資料2に整理されているので、それらを参考にしてほしい。今日の授業を観て、学び合う集団を作っていくために、キーになるものは何かあったか。

■委員

学び合う集団について、小学校は特に「安心して学べる」というものがないとそもそも学習に臨めない。安心して学べる環境がないと、自分の意見を言っていないのかためらってしまう。自分がこれを言っても周囲の子や先生が受け入れてくれる、という安心感があるから言える。そこで自分の考えに対する他者からのフィードバックがあって、さらに次はこうしようと思う。そうやって個人の中で学びが繋がっていく。学びをつなげるためにはやはり安心感が土台にないと無理だと思った。

子どもが安心できる根拠はどこにあるかといえば、小学校ならば教員がどこまで子どもを受け入れるか。評価をして価値づけられるか。そこができるかできないかが大きいだろうと感じた。受け止めるだけじゃなく、中学校教員がしていた

ように、あえて受け流すことも大事。子どもへの対応の仕方は経験年数によるものもあると感じた。

■委員長

「ここでは失敗できる」「批判されない」という安心感があるかないかで子どもたちは変わる。ただ、教員が受け止められるか受け流せるか、となると教員の力量によって変わってしまい、なかなか一般化できない。それらを学校や横須賀市として「安心感のある学級を作る」ということを一般化するにはどうしたらいいか、ヒントになるようなことはないか。

■委員

市内でもある学校とない学校とあるが、「〇〇小スタンダード」のようなものがあり、今回参観した桜小学校にもあると聞いている。例えば、壁面表示は前方だと子どもの視線が散るため、前方の掲示物は少なくするといったものである。

子どもたちは、クラス替えがある4月にかなり戸惑う。前の学年やクラスとやり方が全然違う。そうなったときに困ったことを誰かに伝えられる子はいいが、慣れない時に友達にも教員にも言えないまま5月・6月になってしまい、学習に集中できなくなる子もいる。その心理的不安定さを取り除くには、ある程度の環境や物的なものを学校で揃えていくことは必要かもしれない。

学校の規模や家庭環境に起因することなどからスタンダードを作ることが適している学校もあればそうでない学校もあるが、市として打ち出すならば、実践例を集め年次研修等で情報共有したりするのは一手かと思う。

■委員

中学校は教科担任制だが、今日の理科と社会で観たように「めあて」を提示する、学習の流れを伝えることが統一されていたら、教員の異動で教師が変わっても子どもたちは安心して授業に臨むことができるのではないか。新しい先生にも身構えずにいられるし、小学校も同じようにすることで、中学校へ入学しても「自分の知らないところへ来たわけではない」と安心できるのではないか。

小学校は班学習で、机をつけて話し合うような方法をとっているが、中学校でも4人班の学習は同じような机のつけかたをしている。それらもなんとなく統一できると良いのではないか。どの教科でも同じように学習できるのはいい。教員によって授業の進め方が異なると負担があると生徒から聞いたことがある。ある程度授業の進め方や環境が統一されているのは大切だと思う。

■委員長

横須賀市は、小中連携で小学校と中学校がつながっている。小学校から中学校

に行っても受け継がれていくものがある。発達の段階があるので全く同じにするというわけにはいかないかもしれないが、小中でつなげていくことを配慮していることは重要ではないか。

安心感についてだけでなく、他にもあれば。

■委員

保護者からの視点で意見を申し上げると、意見を出しやすい教員やクラスの雰囲気がある一方で、そうでない場合もある。他の学校の授業を観させていただいた時に思ったが、全てが雰囲気の良いクラスというわけではなく、力量のある教員とそうでない教員とでは、同じようにはできないだろうと思った。多くの教員が、スキルや慣れ、場づくりのようなものの成功例をもっと観ていかないと教員の戸惑いも大きいのではないかと思う。保護者としては子どもがグループで対話し、深い学びをすることは良いことだと思う。賛成であるが、そのような学びを起すには教員の負担も増えるし、教員によっての力量の差も起こりうる。そのあたりが肝ではないか。

■委員長

前回の会議でも、できるだけ多くの教員の授業を観ること、特に横須賀の場合には、校内研究や教員委員会主催の公開授業の場を活用することが挙がっていた。他の教員の授業を参観することが大事なことである。教員として「自分はこれでいい」と思っている、そうでないことにどれだけ気付けるかが大切。そういう機会を教育委員会として提供することと、学校の自助努力としてそのような仕組みを取り入れていくことも必要。今日の2つの学校のような授業ができている学校は少ないと思う。むしろ改善を要する学校のほうが多い。教員の底上げをどうしていくかは大きな課題。

授業に困難さをかかえる教員は、児童生徒指導も困難さをかかえている。これらはリンクしているので、どちらかだけが上手いということはない。ここがつながっていることをどれだけ意識しているかも重要である。

さらに、ICT端末と実体験の部分もポイントである。坂本中はフロンティア研究でずっとICT端末の活用に取り組んでいた。しかし、教員にも差があると聞いている。この差をどう埋めていくかも考えなければならない。

今回の坂本中学校の授業を観ていると、どの場面でもずっと使っていた。端末を活用する場面で教員はどういう役割になるのか考えなければならない。今日私が観た限りでは、教員も子どもも画面だけを見ていた。教員は画面ばかりを見て、子どもの姿を観ている時間が少なかった。これで大丈夫なのかという不安も残る。

ICT端末を使うことと、今日の理科のように実際に体験して写真を撮り、それをもとにして授業をつくる。そのような教材研究をしていくことが大切である。

子どもたちはICT端末を使うだけでなく、自分が操作したいし体験したいと思っている。そういう授業をどう作るかということにも関わってくるが、それについてのお考えはいかがか。

■委員

先日、教育研究所の指導主事と話す機会があった。もう「使ってみよう」の段階はすでに終わっているはずなのに、まだ、そこから脱却できていない教員がいる。そのため、効果的な使い方を模索するに至っておらず、授業のどこで使えば効果的なのか見定められない。

ICT端末の良いところは、すぐに調べてすぐに共有できる即時性と、坂本中学校長からもあった個人の記録を残せること。この二つの利点があるのであれば、社会の授業ではこの学習で、算数の授業ではこの場面で、単元の中でどう活用するかという見極めができる。単元のどこで使ったら効果的だという情報があれば知りたいし、本市において誰が効果的な実践をしているのか、あれば知りたいと思う。自分自身は、本校の教員たちの使い方を観てよいと思ったものを、管理職として校内で広げている程度である。ICT端末の活用の広がりとして、このような口伝えでは広まっていかなさと思っている。

■委員長

ICT端末は使うことが目的ではない。使っていれば良いと考えている授業については、立ち止まって考えてほしい。授業にはそもそもねらいやめあてがある。その中でどのような教材を使うのか。ICT端末を使うなら、どう使うのか、どのような評価ができるのか、これらがセットでなければならない。ICT端末を使っていれば個別最適化しているという安易な考えが見え隠れしている。

ICT端末の効果的な活用を広めていくことについては、教育委員会に情報提供していただくのが良いだろう。教員によって得手不得手もあるし、教員独自の使い方も出てくるので、学校の自助努力だけでは限界がある。

■委員

「学び合う集団」も話し合っていれば、学び合っていると観てしまいがちで、ICT端末も同様である。どう授業の中で児童生徒が学びを深めていくかが重要である。なんとなく教員がICT端末を使えるようになってきたし、児童生徒の話し合いや協働を促そうとしているが、質的な深まりがあるのかは疑問がある。

資料3の3ページの「横須賀市の結果」に「各教科で学んだことを生かしながら自分の考えをまとめる活動を行っていましたか」という問いに、「やってこなかった」と回答した児童生徒がいる。これは子どものせいではなく、授業の中でそういった活動を設定していなかった教員に原因があると読み取れる。

話し合いをする時に目的やゴールを明確にし、友達と協力し、その中で自分の考えの変容を自覚する。そういう経験を積むことで子どもに力が付いていく。

管理職としては、教員は子どもがなんとなく話し合いをして、なんとなく学んでいるから良いとしていないか。また、振り返りもただ書かせて安心していないか、その内容も「楽しかった」というようなものになってしまっていないかと不安になる。そうではなく、今日の授業で自分は何を学んだのか、自分の考えがどう変わったのか、今日分かったことを使って、次はどういう課題を解決しようとしているのか。そういう授業や単元づくりをしていかない限り、そのような子どもは育っていかないと思う。

小学校は 45 分の中でどのような目的があり、どこの場面で ICT 端末を活用すれば協働的な学びになるか考え、単元計画も同じように、例えば 10 時間ならその中のどこで協働的な学びをし、子どもの力を伸ばしていくのかを構想する。それを校内研究等の機会を使って、学年や学校で実際に構想し、それがどうだったかを研究することで教員の力が付いていくのだが、その辺りの意識が弱いのではないか。

温かい雰囲気づくりや学級経営は大前提だが、今、横須賀市の教員が直面している問題は、3 年間コロナがあって授業研究が進まなかったことであると感じている。多くの教員が主体的な学習に取り組む態度を、どのように育て見取っていくのか悩んでいる。教員の中にはそれらの根拠を提示できる人もいるが、そうでない教員もいる。校内研究の重要性をどんどん市内に広めたり、そこに指導主事が入って、指導したりしていくことで変わっていくのではないかと思う。

■委員長

根本的なことをご指摘いただいた。根本的なことだが、それが学校によっては、できていない。最近「働き方改革」が前に出てしまい、校内研究も負担にならないような時間や内容に設定している。教員同士が切磋琢磨したり一つのことを追究したりするような時間がなく、教員が不安を抱えたまま授業をしている状態を改善していかなければならない。

横須賀市ではフロンティア研究や教育課程研究会などの研究スタイルがあると思うが、これはずっと同じなのか。教育委員会は、今の時代に合う形で、研究を指定しているのか。

■事務局

市が研究を指定するフロンティア研究の研究主題は、現状の中で学校に必要な研究主題が何かを試行錯誤し、時間をかけて設定している。課題としては、主題設定に時間がかかり、募集期間が短くなってしまっていることと、各校で研究したことを他の学校に還元していくことであると感じている。

■委員長

教育委員会が指定する研究主題を、学校現場から何うような機会はあるか。例えば、学力向上担当者会や校長会などで、今後どういう研究主題が必要かを問いかけ、意見を吸い上げるような取組はあるか。

■事務局

直接、学校に意見を聴くような取組はない。

■委員

学校としてはどうか。市教委からの研究指定が、これなら自分たちの学校で取り組んでみたいというものになっているか。学校研究の質を高めるために研究指定という仕組みは使えると思うが、その教育委員会の事業について改善の余地があるならば行っていくべきかと思うが。

■委員

市から提示される指導の目標と重点があり、そこから各学校で重点プランを作る。その中に研究も入る。市から提示されたものと各校の子どもの実態をうまく調整し、学校研究の主題を作っている。ぴったりと合致しているわけではないが、本校の実態に重きを置いて研究主題を設定して、取り組んでいる。下からの吸い上げという話があったが、市教委が細かく全てを吸い上げることは難しいと思うが、大まかな全体の傾向を把握することはできるかもしれない。

■事務局

教育課程研究会の主題・副主題については、毎年、現状の課題が何かを話し合い、検討している。

今年は資質・能力を育むには1時間の授業だけではなく単元という長いスパンで観るべきだという考えから、副主題に「単元構想」「単元計画」という内容を入れた。それにより、校内研究で1時間分の指導案しか渡されなかった際に「単元ではどのように考えますか」「単元構想を作って評価計画もつけましょう」という話ができるようになった。我々もこれが大切だという研究主題を元にしながら校内研究の助言や指導案検討ができ、成果と感じている。

各校から意見を吸い上げることについて、確かに今まで現場の声を拾っていくことができていなかった。学力向上担当者会などもあるので、機会を捉えて声を拾えるのではないかと考えている。

■委員長

我々が考える授業についての共通性は出てきた。しかし、それを市全体に広げ

た時に、地域性や個人の違いで難しい部分もあるだろう。私も横須賀の学校に多く関わっていて、授業改善が進まない学校、教員の意識が研究に向かず、多くの校長が苦勞している学校も観ている。そういう実態があるので、市として取り組む方向性を示しても、どこまで実行できるかという懸念はある。とは言っても市全体で、一緒に取り組んでいきたいと思いますというメッセージはとても大切である。

■事務局

委員の皆様質問をさせていただきたい。さきほどの安心感の話で「スタンダード」という話題が広がった。今日の授業の中で、「あの時こんな失敗をした」というような子どものネガティブな言葉に教員が「でも、〇〇さんはあの時、こんなことがんばっていたよね。それは、失敗じゃなくて挑戦なんじゃない」と肯定的な言葉を加えて声をかけていた。

これまでの議論にあった「スタンダード」は子どもたちがどう授業を受けるのか、教室をどのような環境にするのかというようなハード面が多かった。

先日、伺った公立保育園では、保育者の子どもとの関わり方についてのきまりがあった。声の大きさは、危険な場面を除き、普段はささやくような声で子どもたちに声をかけようというものである。他県の学校でも、子どもへの声かけの際に、絶対にマイナスイメージな言葉は使わないことにしたという取組も聞いたことがある。

授業の受け方や環境というものではなく、教員が子どもとどう接するのかという教員の姿勢についてのスタンダードのようなものがあるか、各学校の状況を伺いたい。

■委員

本校は「スタンダード」のような統一する何かはない。前任校では、スタンダードではないが、学習の際には児童と「こう接していきましょう」ということを周知した。だがその場では、共通理解したが、いずれ風化していく。担当教員がいるときはいいが、新しい教員と入れ替わる中で風化していくので難しさを感じている。改善はしていくのだろうが、なぜ、それを作ったのかという思いや作り上げた人の熱量までは伝わっていかない。

■委員

本校では、授業スタンダードがある。全員が同じ学び方ができるように、4月に全教員が、この授業スタンダードについて同じ研修を受けている。

生徒指導に関しても4月に生徒指導担当から、生徒のルールと同じように教師も共通の認識でいこうという話はしている。しかし、本校も毎年、人が変わっている。生徒指導に関して大きなズレはないが、学習に関しては、全体での取組を推進していた教員が異動すると、残った教員はこれでよいのか、形だけになって

いないか、と不安に感じることもある。

今年度、本校では学習の進め方について、もう一度全員で学び直す機会を設けることができた。最初に設定した時より、もしかしたら熱量は落ちているかもしれないが、新しく来た教員も学習の進め方を認識できたと思う。

■委員

初任者には、研修の際に「初任者研修の手引」という冊子が配られている。また、私が以前、初任者と2人で学年を組んだ際には、自分が意識している学級経営や授業準備などを話だけだと分からなくなるので、冊子にまとめたこともある。それをもとに自分でアレンジしてもらおうよう伝えた。このように授業や指導のポイントをまとめたものは探せばいろいろあると思う。

■委員

私は会社を経営をしているので、会社経営の視点となってしまうが、学校はしっかりと決めた目標に向かい、それに対してどうだったかを考え、常に更新していかなければならないのではないかと。学校はどうしても人の入れ替わりがある。入れ替わるとまた1からやり直しになってしまう。

この学力向上推進委員も何年かやっているが、話が進んでいるように思っているが、年度が変わるとまた元に戻っている気がする。根本の体制づくりがないままに、学力向上を推進しなければいけないことに起因しているのではないかと。

この委員会には、意識も高く、スキルを持っている教員の方々が参加している。だから、話し合いも進む。しかし、実際の現場では、ここで話し合ったことからかなり質がダウンした形で「やらなければいけないのですよね」と実行されている。そして、次の年度に入るという繰り返しを観ている。

ずっと進行し続けているだけで、目標に近づけていく努力をしないと、また形を崩して、再度、形を作っているという気がしてしまう。

■委員長

ある教育学者の言葉を借りれば「古い問題の新しい解決」と言える。教育改革は昔から今もこの先もずっとある。その時代では解決できないものがあるから、改革がずっと行われる。その時代の最良と思われる方法で解決するが、残ってしまう課題もある。常に行ったり来たりしているように感じてしまうが、少しずつは進んでいる。まさにその通りだと思う。

先の話にあったように、熱量は風化していく。なぜこれが必要なのか、どうしてこれをやるのかを先に話し合わなければならない。それがなくなると How to してもだめ。「スタンダード」ができてしまうと、それさえやればよいということになり、自分がなぜこれをする必要があるのかを理解できないままになってしまう。

「スタンダード」に乗っかっていけば簡単で「スタンダード」をしていけば形になっているし、周りもやっているから正しいのだろうし、と考える習慣がついてしまう。教師は考えないといけない。なぜなのか、どうしたらいいのか。最後にHow toになる。そういう思考をできるだけ若い頃からしていく必要がある。そして、学校の中の様々なところで、それができる仕組みを作っていきたい。「質の高まり」が必要であることに行き着く。そのサイクルをどれだけ意識して、学校の職員全員で取り組んでいくことができるかが大切な気がする。

今年度は、具体的な答申がほしいと言われている。これまでの議論を整理しつつ、来年度に向けて取組と、短期的・中期的・長期的なプランに分けて整理していくとよいのではと思っている。同じことをやっているように観えるけれど、少しずつ進んでいる状況が作れるのではないか。次回はこの辺りを視野に入れ、まとめに入りたい。

以上で、協議を終了する。

令和5年度

第3回 横須賀市

学力向上推進委員会

●令和5年（2023年）11月15日（水）

●横須賀市立坂本中学校 横須賀市立桜小学校
13:00～

【次第】

- 1 開会
- 2 教育指導課長あいさつ
- 3 会場校校長あいさつ
- 4 本日の趣旨・流れの確認
- 5 授業の視察（桜小学校⇒坂本中学校）
- 6 学校長・授業者を交えた協議
＜協議事項＞
学び合う集団の育成につながる学校の取り組みや授業づくりをどのように意識しているか。
（休憩）
- 7 学力向上推進委員会での協議
＜協議事項＞
本日の授業および協議等をふまえ、各学校において学び合う集団を育成していくために必要な要素とは何か。
- 8 連絡
- 9 閉会

11/15 第3回 学力向上推進委員会 桜小学校・坂本中学校 授業参観詳細

参観のねらい

学力向上推進プランの目標1「学びあう集団の育成」に向けて、児童生徒が自分のことを大切な存在だと実感できる（自己肯定感の向上につながる）教師の関わりや児童生徒が互いを認め合い、仲間と協働しているような場面を見付け、小学校から中学校に向けてどのように学び合う集団が育成されているのか、その過程について考える。

桜小学校		坂本中学校													
12:20	指導主事集合 全体会（委員控室⇒小人数教室）会場準備		12:20												
13:00	委員集合・開会 授業参観の視点・流れの確認		13:00												
13:20	5時間目 グループごとに授業参観														
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>A</th> <th>B</th> <th>C</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>6年2組</td> <td>5年1組</td> <td>4年1組</td> </tr> <tr> <td colspan="3">移動</td> </tr> <tr> <td>4年1組</td> <td>6年2組</td> <td>5年1組</td> </tr> </tbody> </table>	A	B	C	6年2組	5年1組	4年1組	移動			4年1組	6年2組	5年1組		
A	B	C													
6年2組	5年1組	4年1組													
移動															
4年1組	6年2組	5年1組													
13:33															
13:35		中学校は5時間目 授業開始	13:35												
13:48															
13:50	中学校へ委員移動	中学校でグループごとに授業参観	13:55												
		<table border="1"> <thead> <tr> <th>A</th> <th>B</th> <th>C</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1年1組</td> <td>A棟2年1組</td> <td>B棟1年3組</td> </tr> <tr> <td colspan="3">移動</td> </tr> <tr> <td>A棟2年1組</td> <td>B棟1年3組</td> <td>1年1組</td> </tr> </tbody> </table>	A	B	C	1年1組	A棟2年1組	B棟1年3組	移動			A棟2年1組	B棟1年3組	1年1組	
A	B	C													
1年1組	A棟2年1組	B棟1年3組													
移動															
A棟2年1組	B棟1年3組	1年1組													
14:05	授業終了		14:08												
	※理科室は第三理科室	A棟2FからB棟へ移動できる													
	※小学校は委員会活動がある (14:25～15:10)		14:10												
		HRや下校の様子なども見ていただく。 その後、桜小学校の全体会会場へ移動。	14:25												
	学力向上推進委員会①（会場校校長・できれば授業者も参加）		14:45												
	参観した授業から、学びあう集団の育成につながる各学校の取り組みや 授業づくりの視点で協議する。														
	①の協議終了		15:30												
	休憩（10分）※委員以外は退室														
	学力向上推進委員会②		15:40												
	②の協議終了		16:30												

第 2 回学力向上推進委員会 議事録まとめ『学力向上に繋がっている成果やその背景』

教師の学びと子どもの学びは相似形

先生が受け止めてくれる

結果ではなく、失敗やがんばりを
認めてくれる

安心して学べる

多様な価値観を認め合う
日常的に話し合う学級の風土

必然性のある動機付け

自分事の課題

直接体験

自覚・実感をともなったふりかえり

スマホの利用時間の増加

小4算数のフォロー

意識調査の実施時期

管理職や同僚が認めてくれる

教材研究と丁寧な子どもの見取り

安心して働ける心理的安全性

校内研究の充実 具体的に何かに取り組む
授業改善について語り合う文化

子どもが「どう思うか」という教材研究

やるべきことの整理

教科等指導員の授業公開

ミドルリーダー 研究協議の視点の明確化

研究会に所属する意義や大切さ

教科担任制の活用

児童生徒への結果のフィードバック

令和5年度

全国学力・学習状況調査（小6・中3）の分析結果 ～ 教科に関する調査結果と質問紙調査結果のクロス集計 ～

目次

1. 「横須賀市学力向上推進プラン」に係る分析

目標1 学び合う集団の育成を図る

- (1) 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善・・・・・・・・・・ 2～8
- (2) 自己肯定感に関する状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9～10

目標2 粘り強く学ぶ力の育成を図る

- (3) 記述式の設問に関する解答状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11～14
- (4) 記述式の設問に関する正答率と無解答率（市、国、県比較）・・・・ 15

2. 「ICT機器を活用した学習状況」に係る分析・・・・・・・・・・ 16～17

3. 今後の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

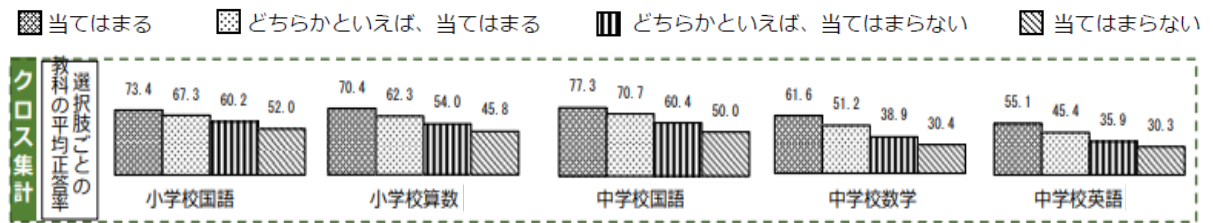
1. 「横須賀市学力向上推進プラン」に係る分析

目標1 学び合う集団の育成を図る

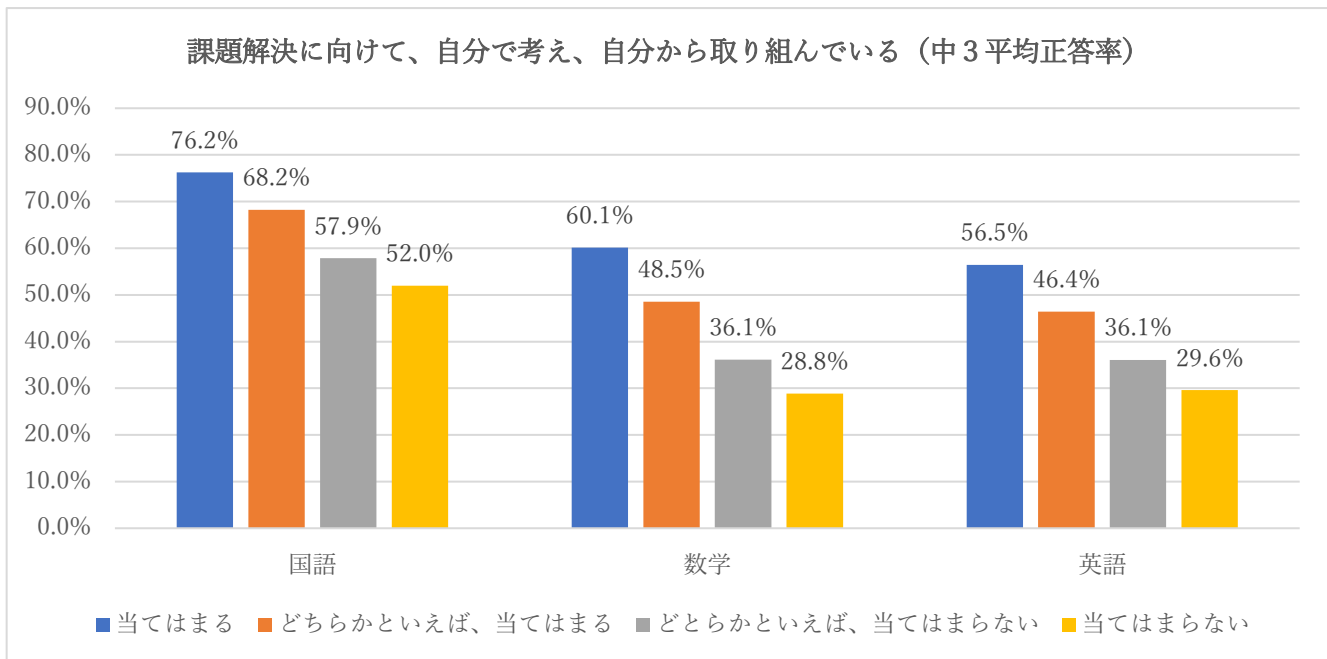
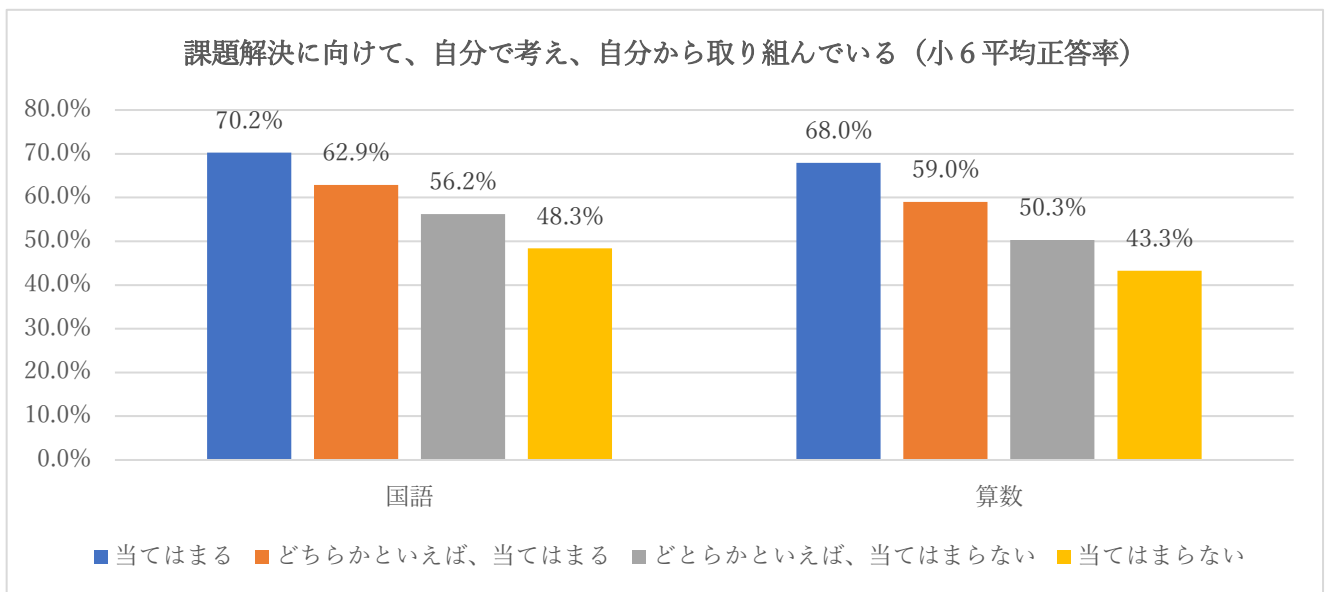
(1) 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

① [課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか] × [各教科平均正答率]

【全国の結果】



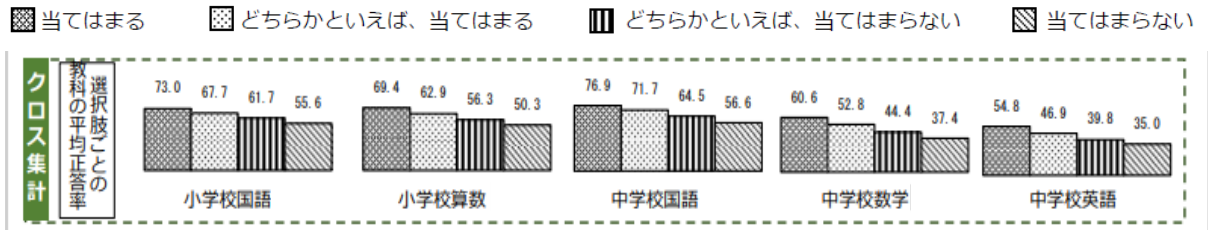
【横須賀市の結果】



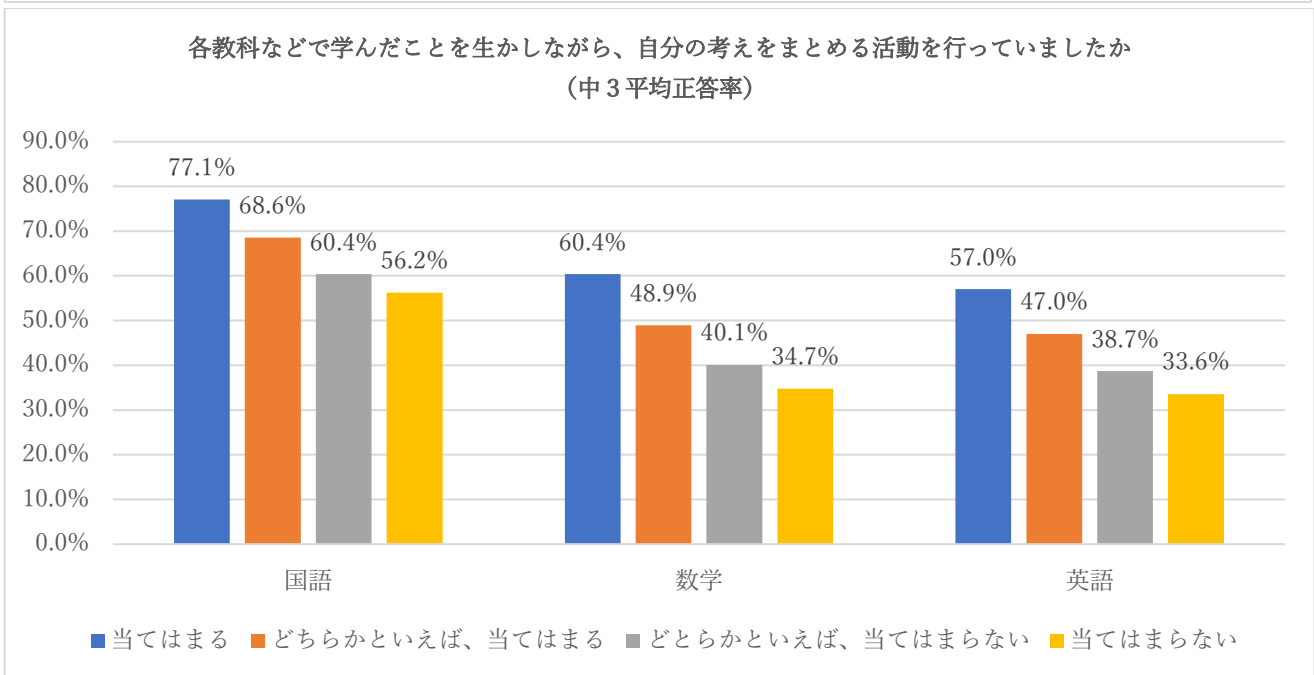
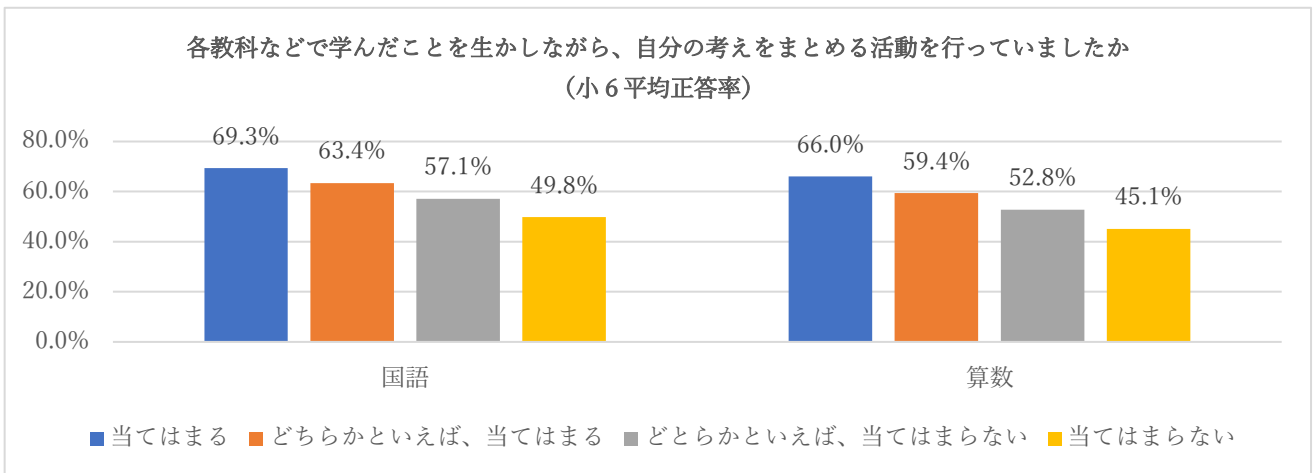
② [各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか]

× [各教科平均正答率]

【全国の結果】

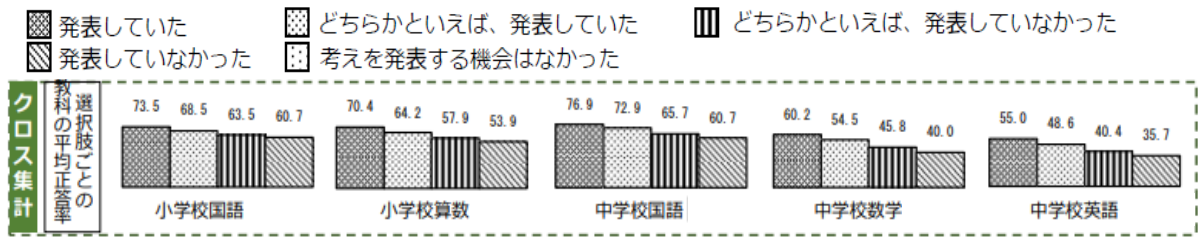


【横須賀市の結果】

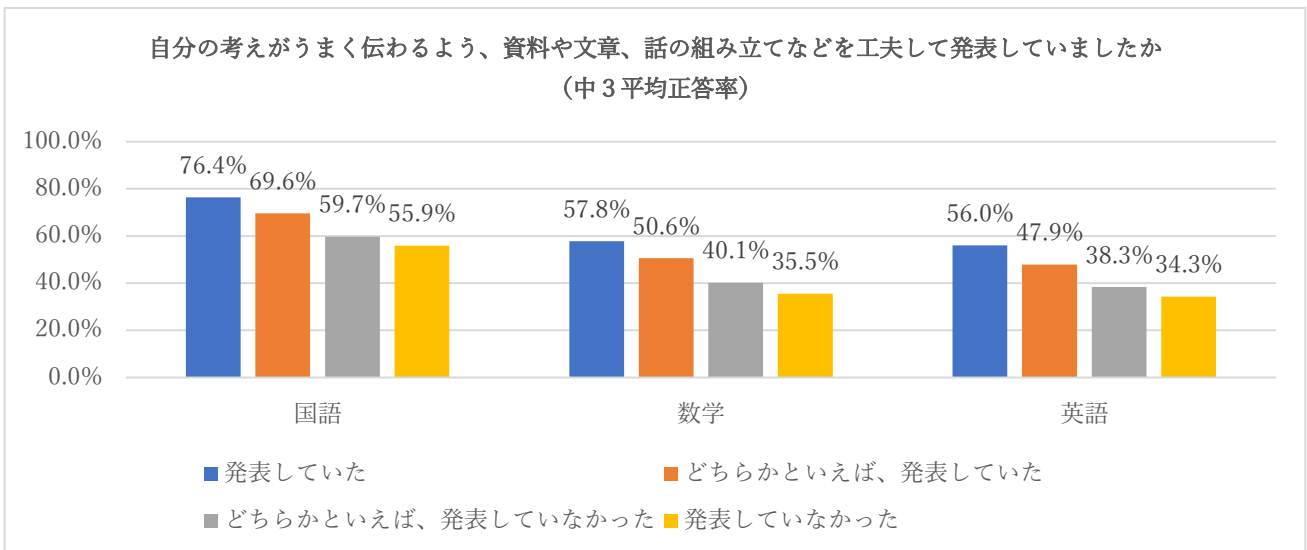
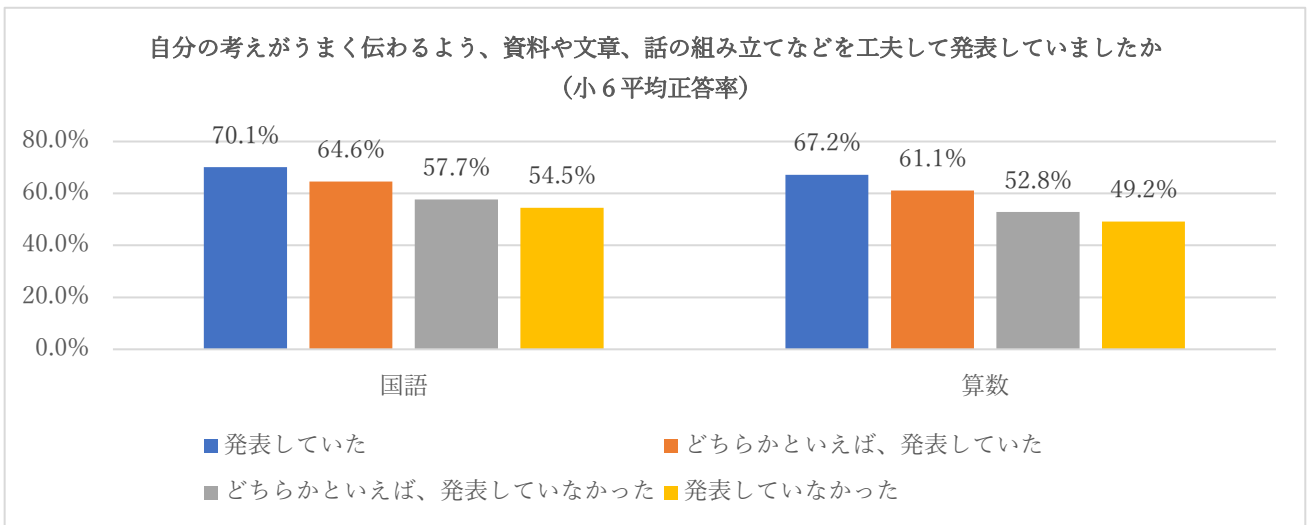


③ [自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立などを工夫して発表していましたか] × [各教科平均正答率]

【全国の結果】

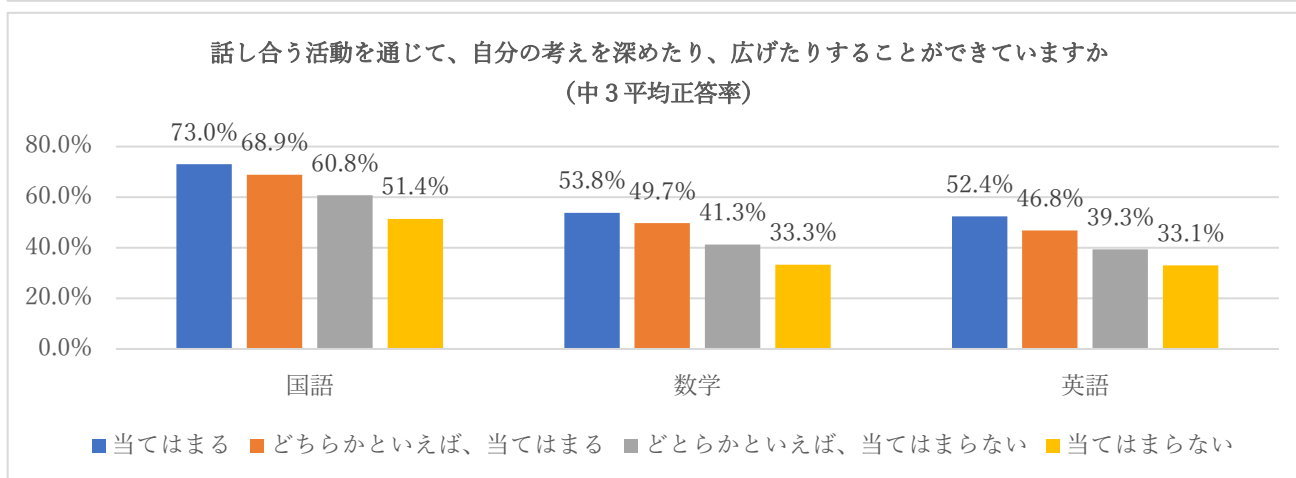
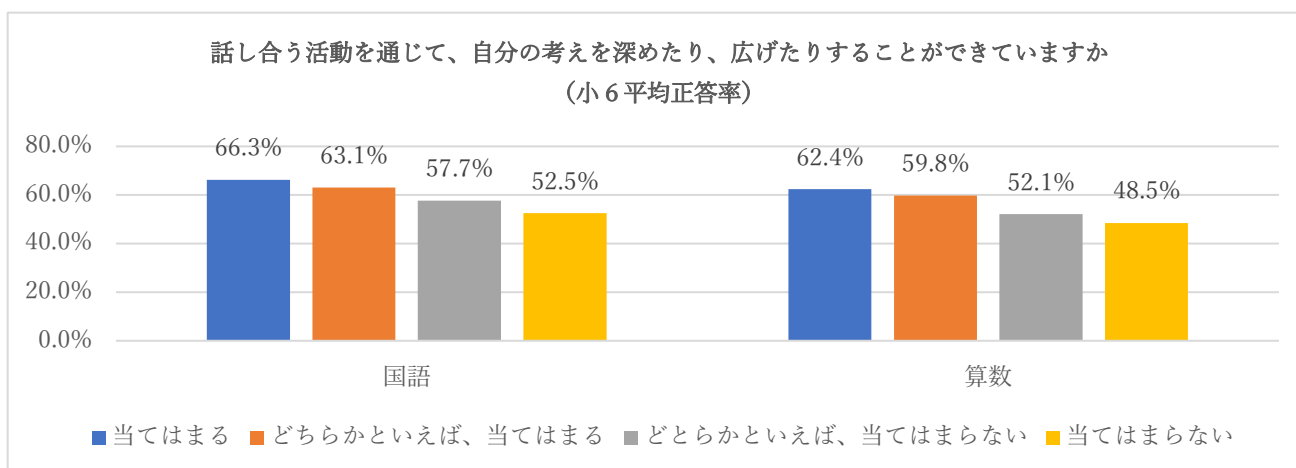


【横須賀市の結果】



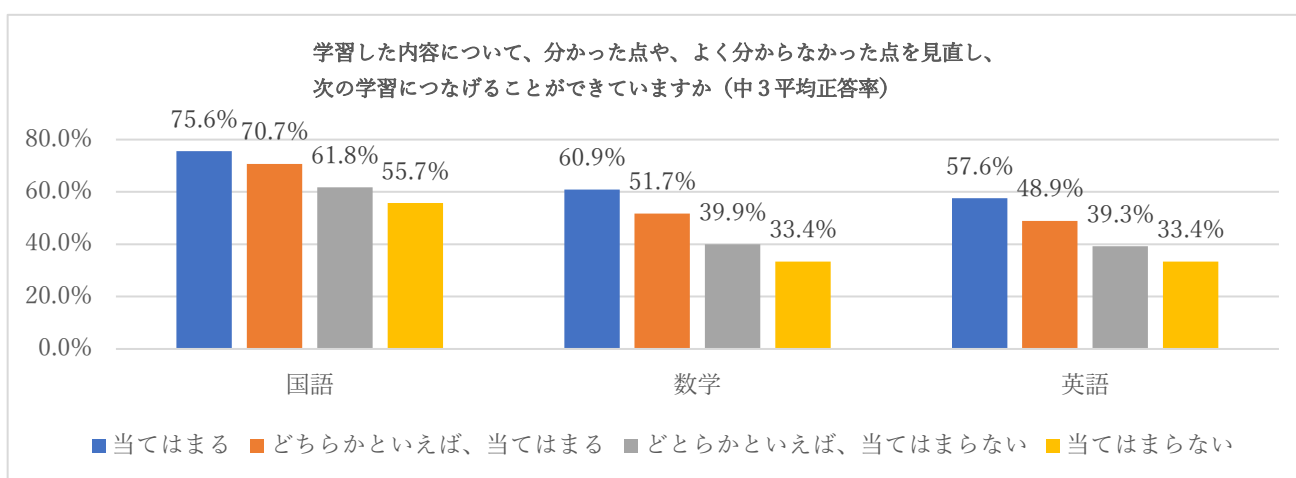
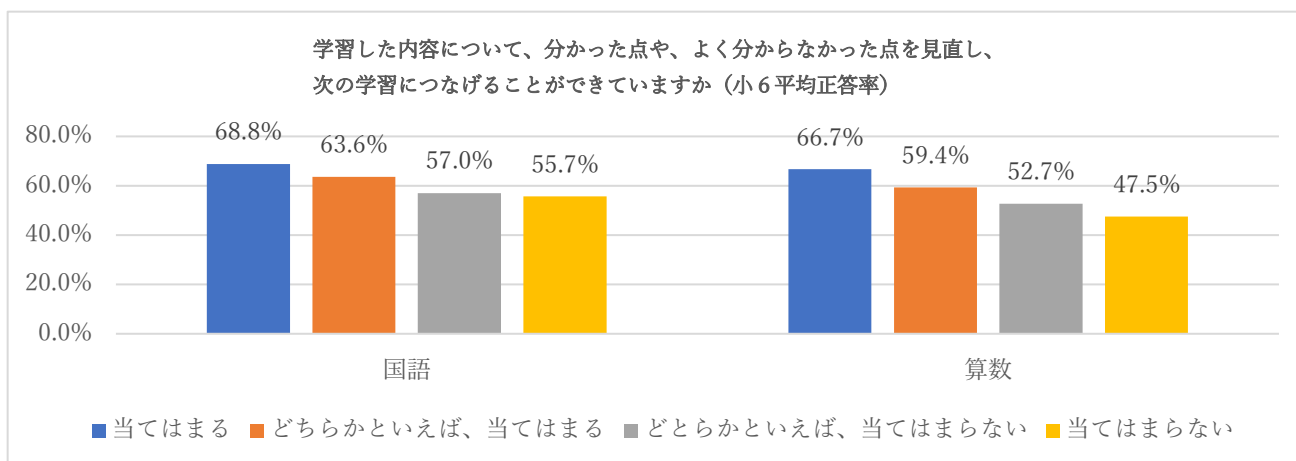
④ [学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか] × [各教科平均正答率]

【横須賀市の結果】



⑤ [学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができる] × [各教科平均正答率]

【横須賀市の結果】

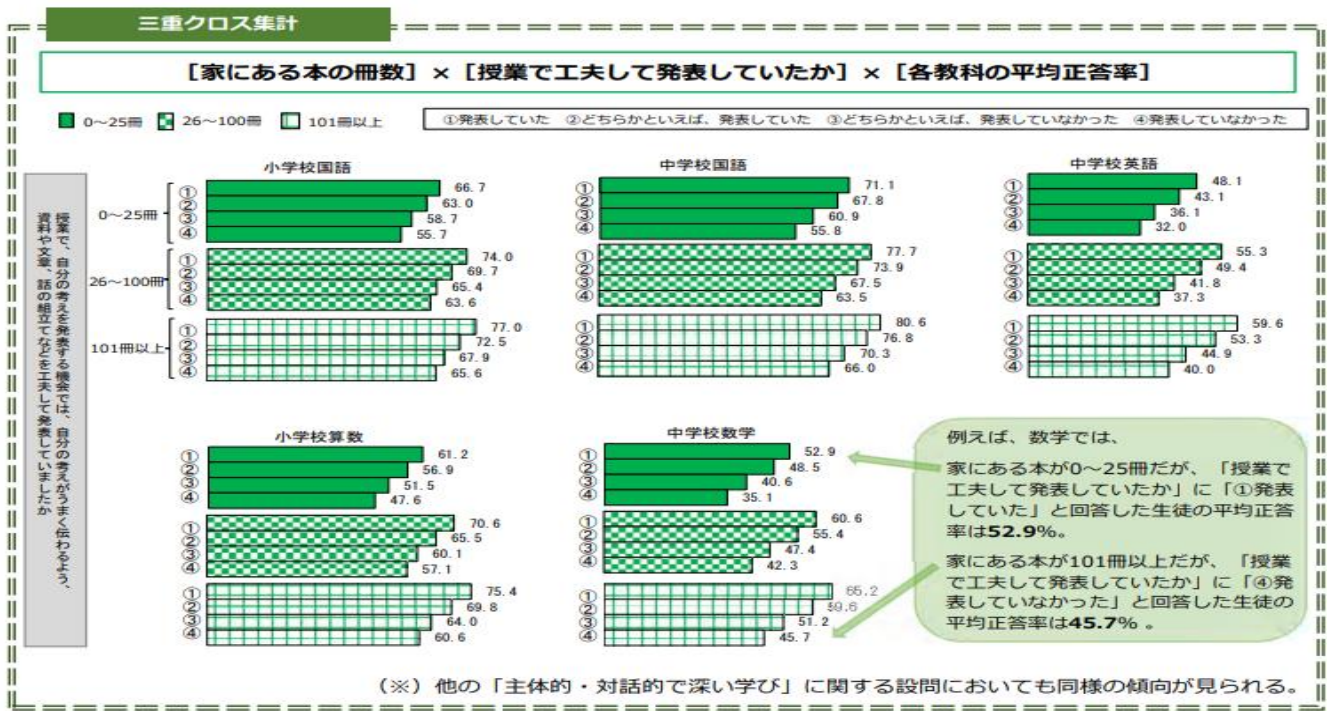


分析

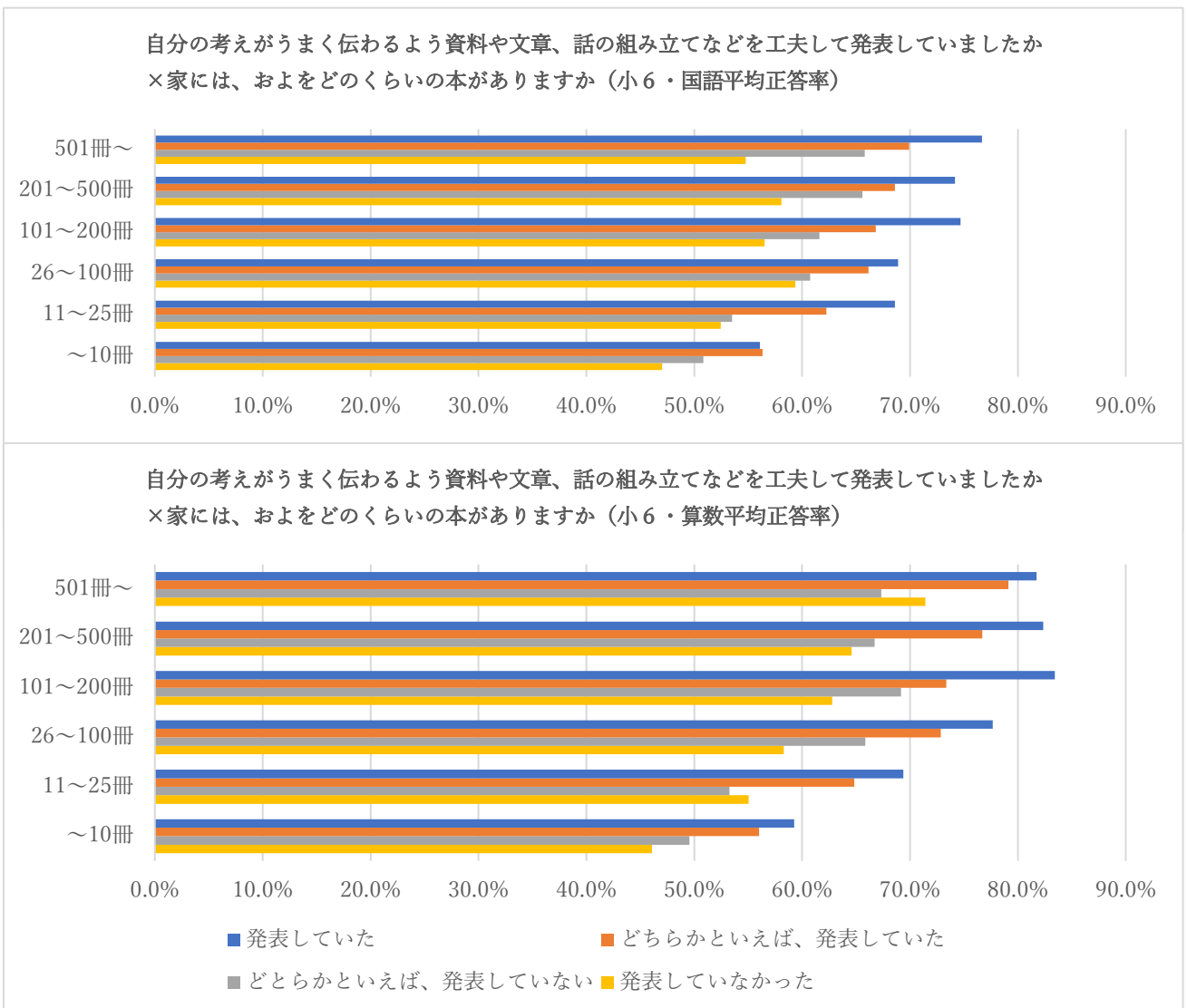
「主体的・対話的で深い学び」に取り組んでいると自覚している児童生徒の方が、平均正答率が高い傾向が見られる。また、中学校において、よりその傾向が見られる。

⑥ [家にある本の冊数] × [授業で工夫して発表していたか] × [各教科の平均正答率]

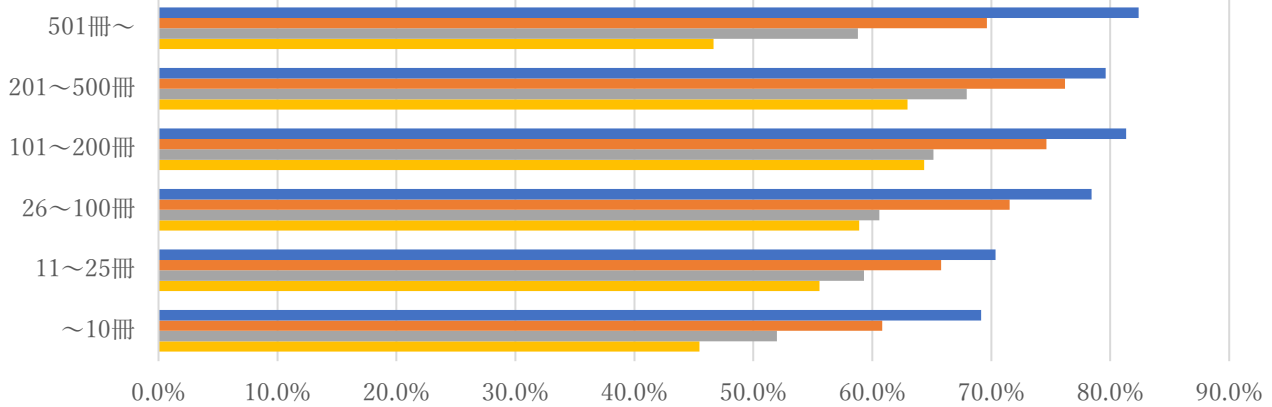
【全国の結果】



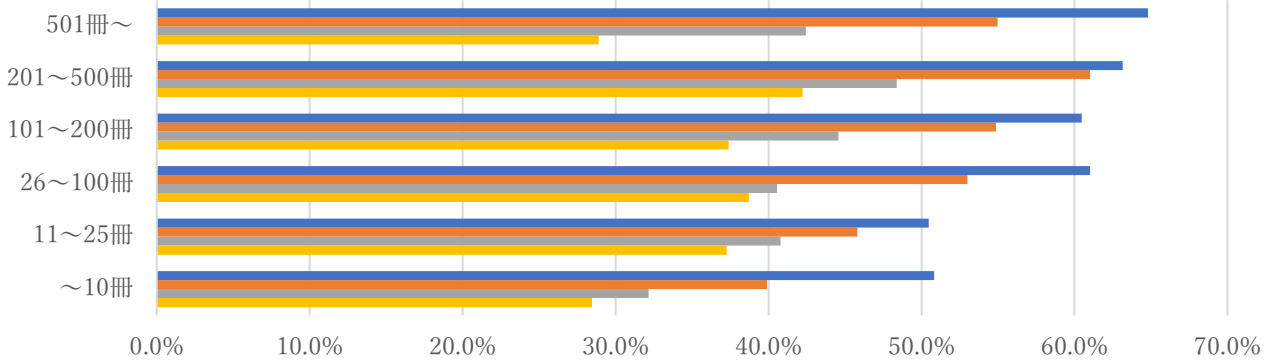
【横須賀市の結果】



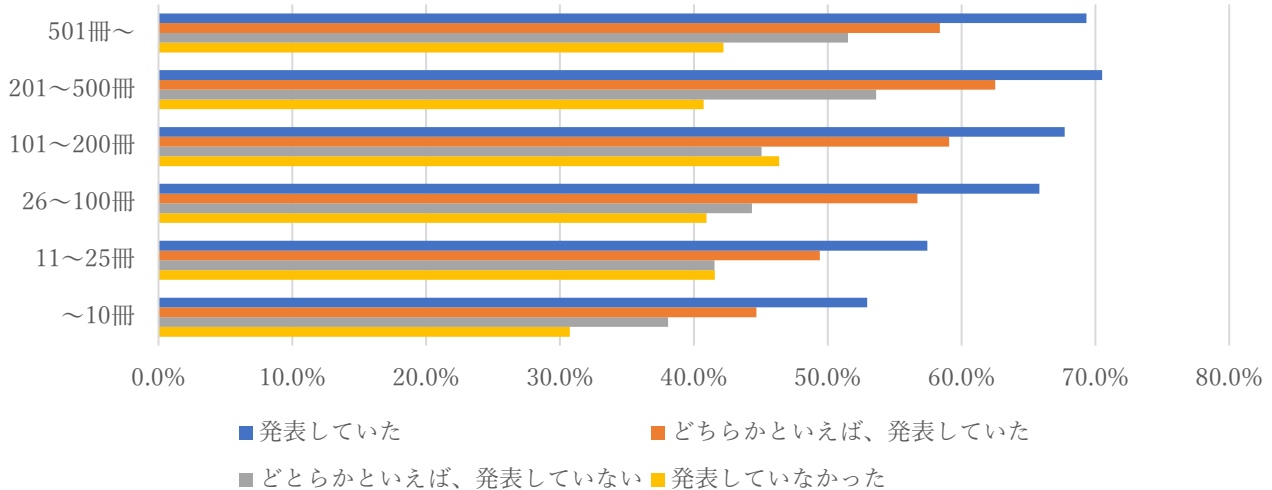
自分の考えがうまく伝わるよう資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか
 ×家には、およそどのくらいの本がありますか (中3・国語平均正答率)



自分の考えがうまく伝わるよう資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか
 ×家には、およそどのくらいの本がありますか (中3・数学平均正答率)



自分の考えがうまく伝わるよう資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか
 ×家には、およそどのくらいの本がありますか (中3・英語平均正答率)



分析

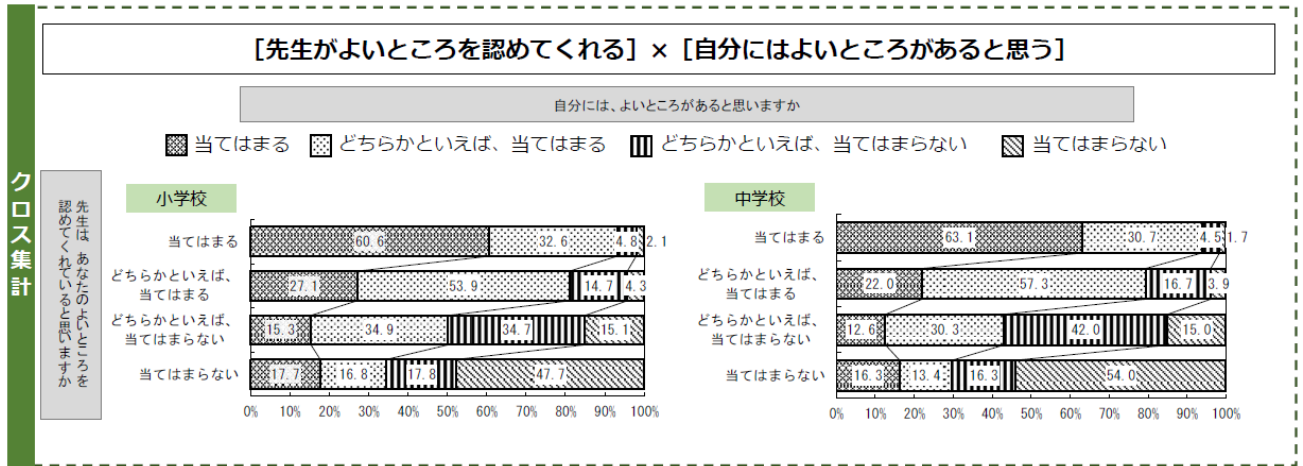
「主体的・対話的で深い学び」に取り組んでいると自覚している児童生徒は、家庭の社会経済的背景 (SES:Socio-Economic Status) が低い状況にあっても、各教科の平均正答率が高い傾向が見られる。

※全国の資料では、国際学力調査も参考に、「家にある本の冊数」を家庭のSESの代替指標として用いられている。

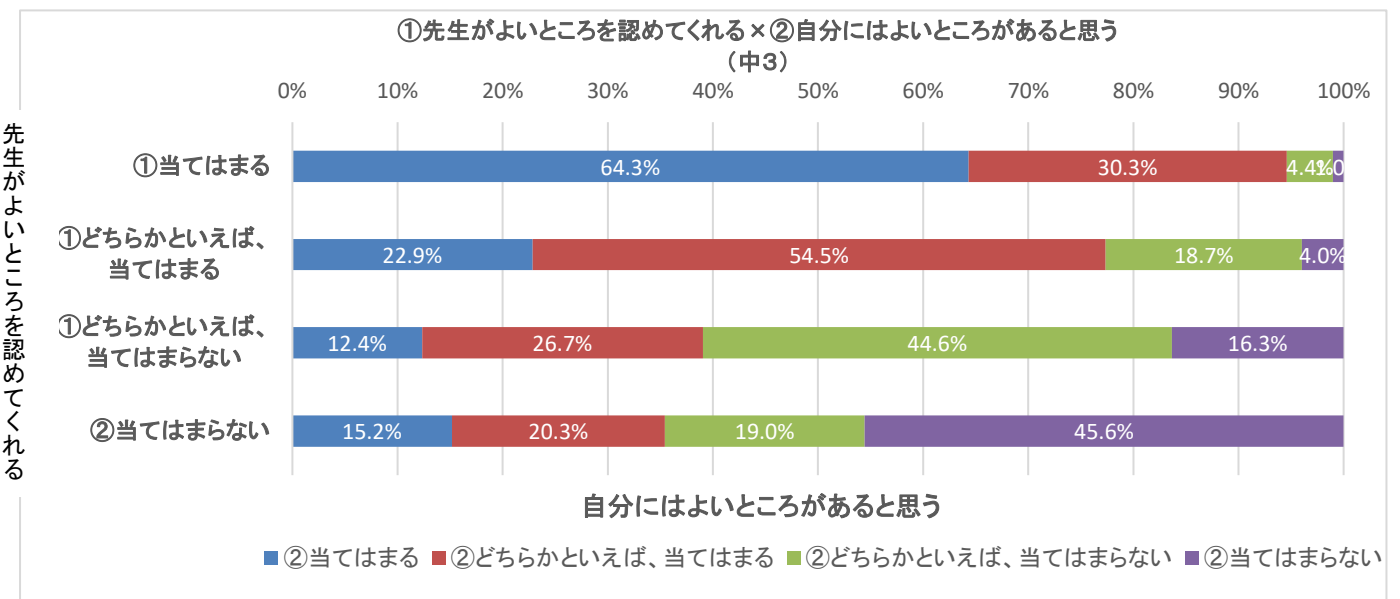
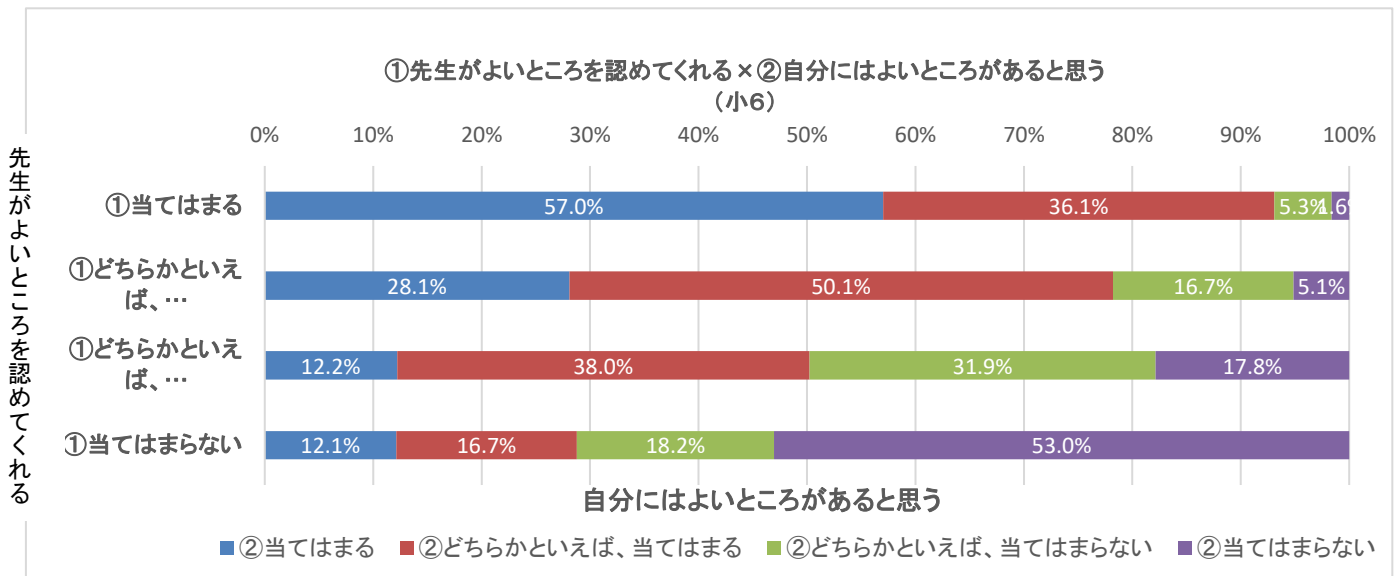
(2) 自己肯定感に関する状況

① [先生がよいところを認めてくれる] × [自分にはよいところがあると思う]

【全国の結果】

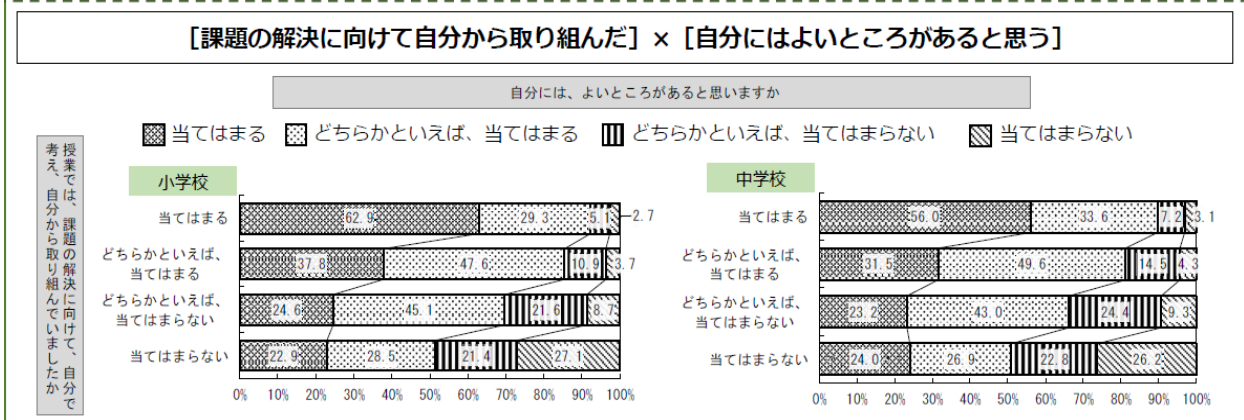


【横須賀市の結果】

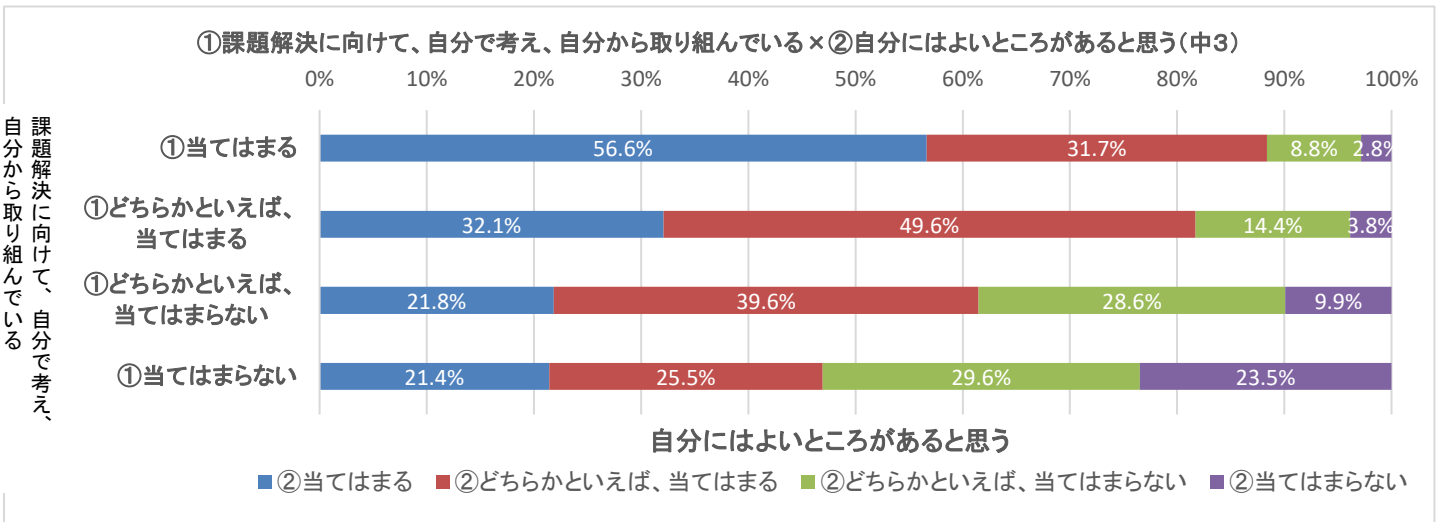
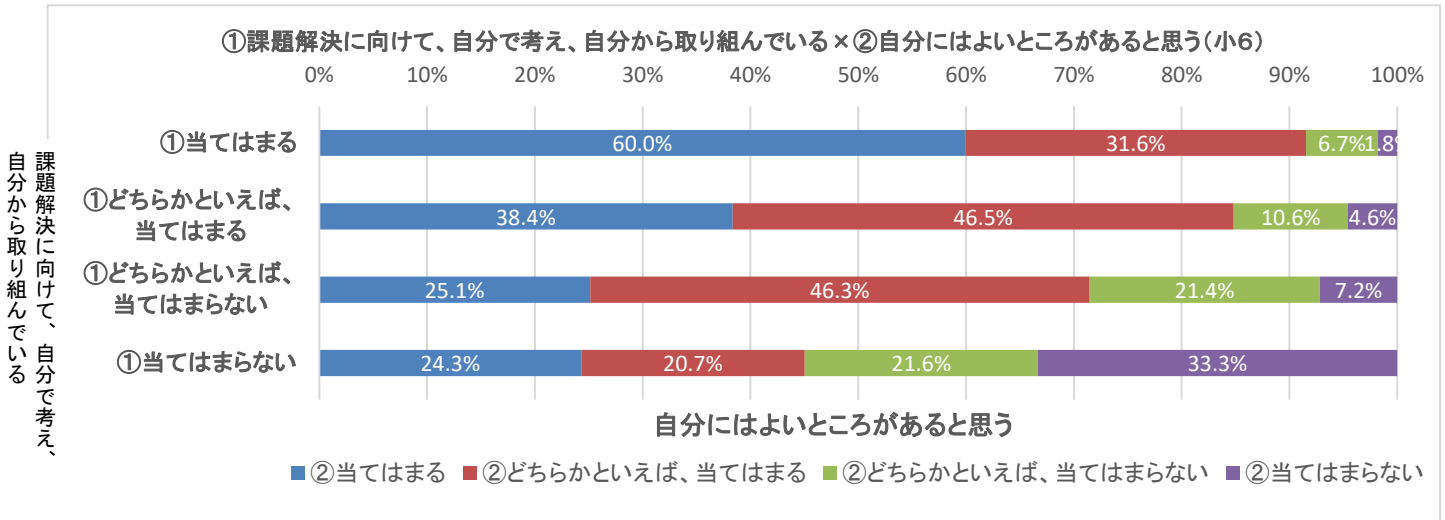


③[課題の解決に向けて自分から取り組んだ]×[自分にはよいところがあると思う]

【全国の結果】



【横須賀市の結果】



分析

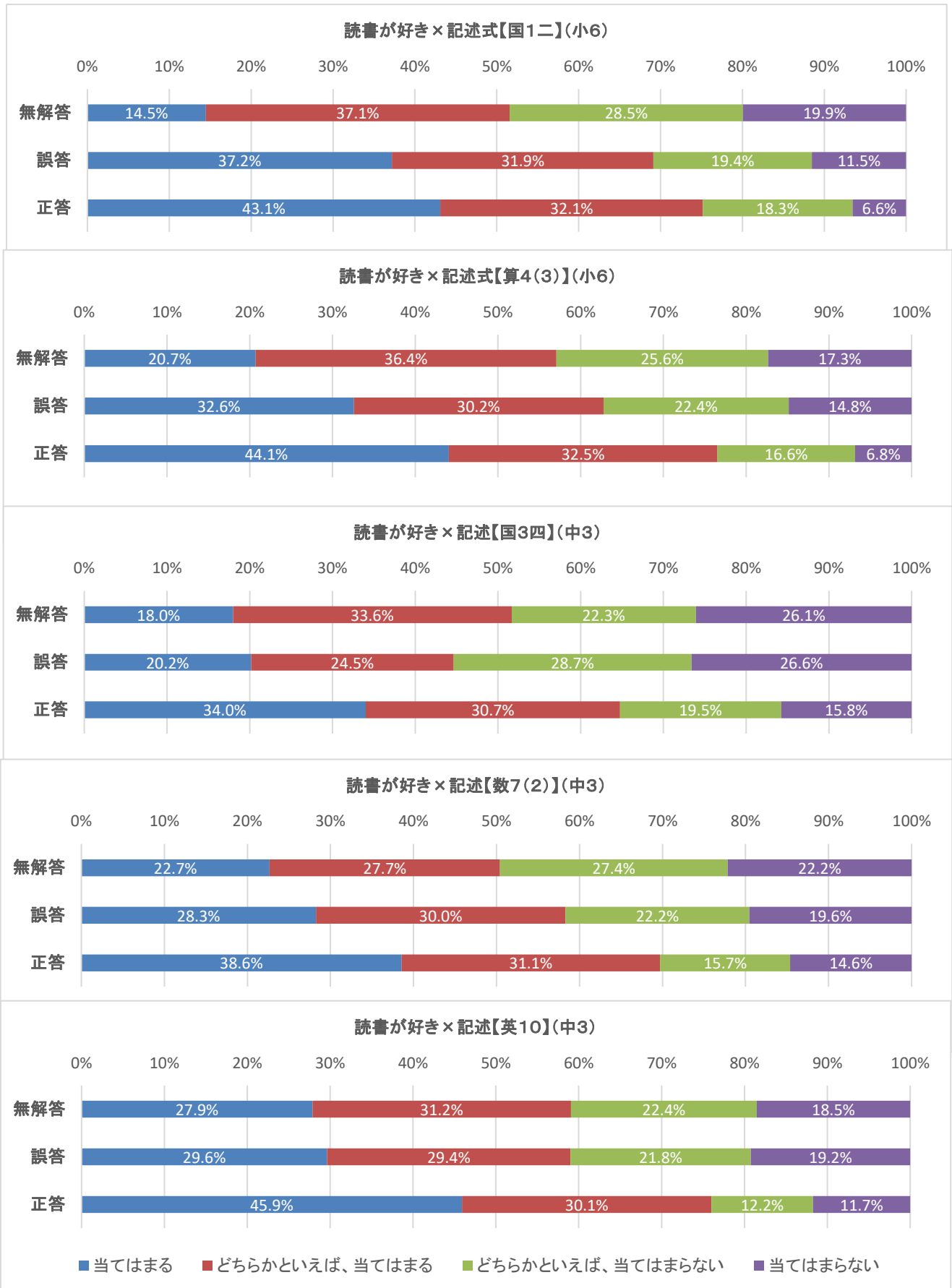
- 「先生がよいところを認めてくれる」と実感している児童生徒の方が、自己肯定感が高い傾向が見られる。
- 「課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」と自覚している児童生徒の方が、自己肯定感が高い傾向が見られる。

目標2 粘り強く学ぶ力の育成を図る

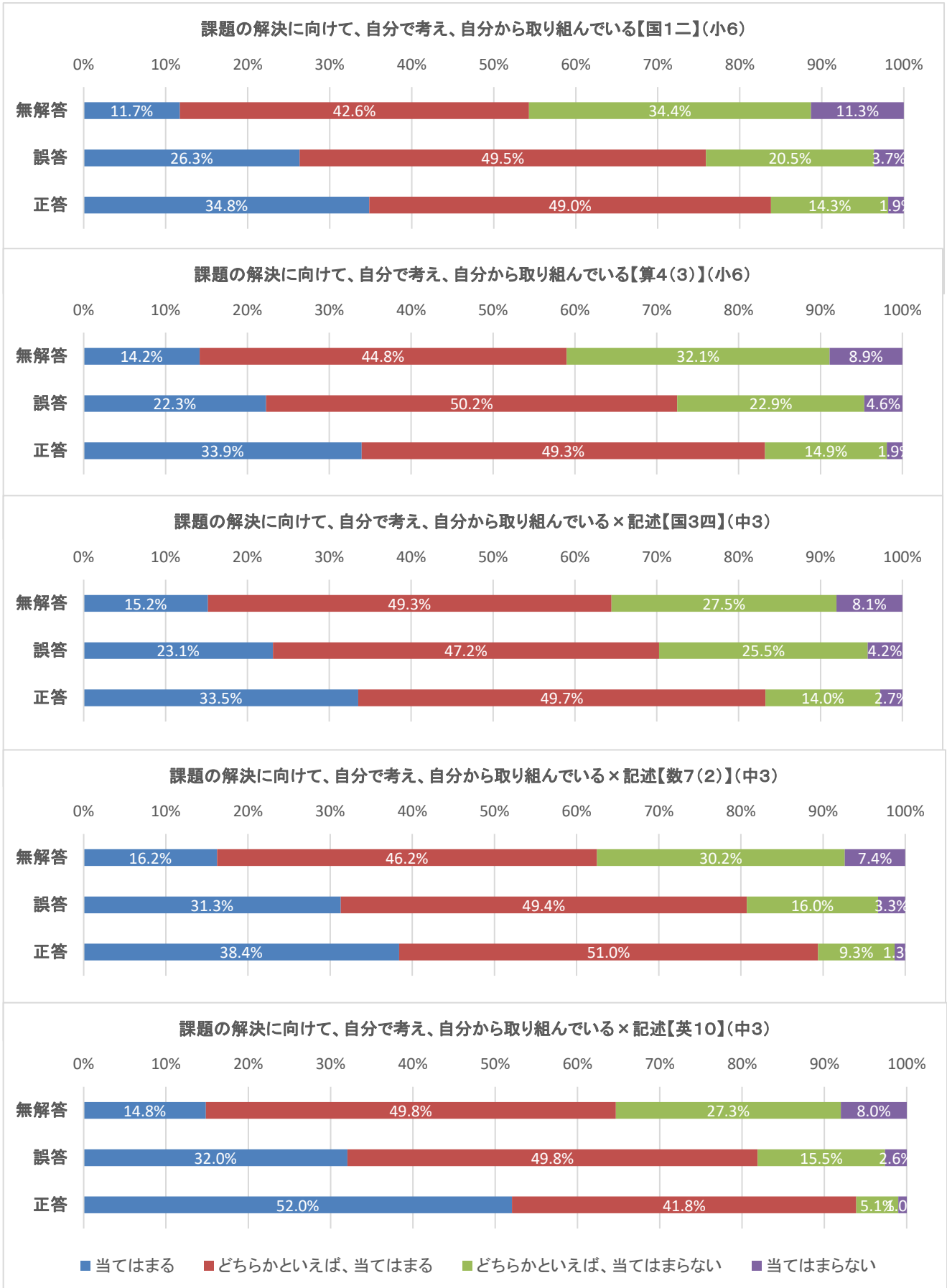
(3) 記述式の設定に関する解答状況

① 「読書は好きですか」 × 「各教科記述問題の解答別」

【横須賀市の結果】



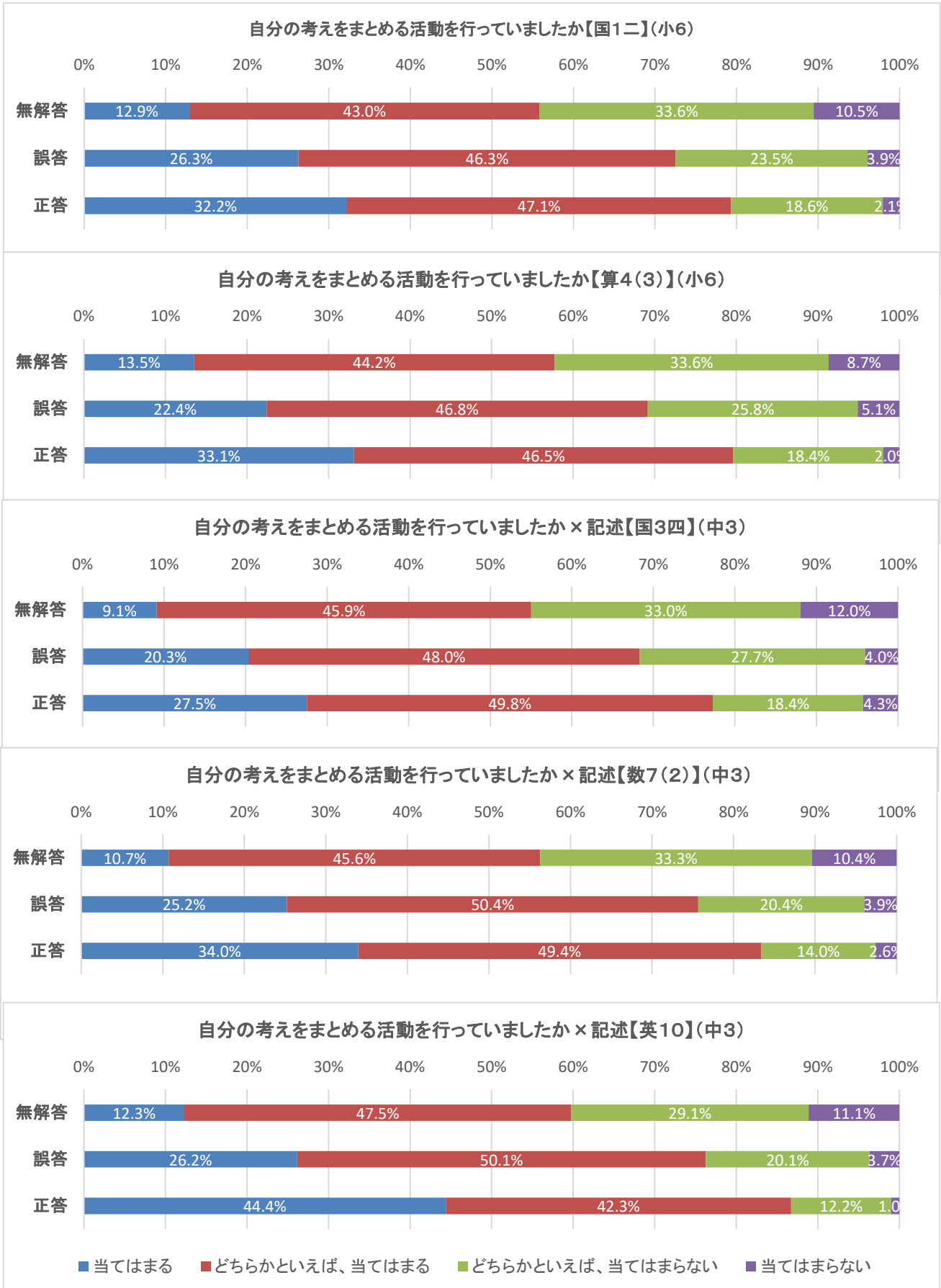
② [課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか] × [各教科記述問題の解答別]
【横須賀市の結果】



③ [各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか]

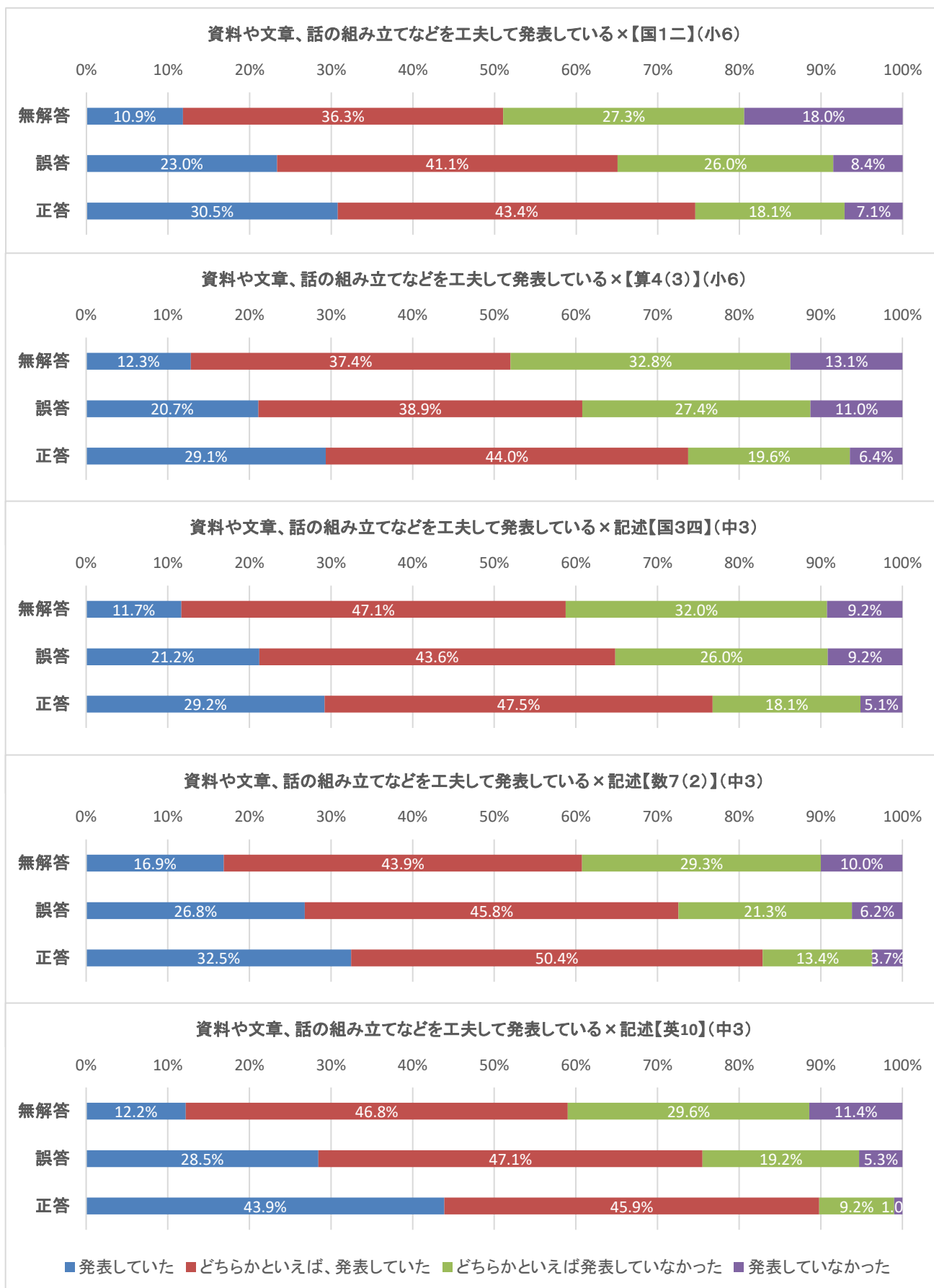
× [各教科記述問題の解答別]

【横須賀市の結果】



④ [自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立などを工夫して発表していましたか] × [各教科記述問題の解答別]

【横須賀市の結果】



(4) 記述式の設問に関する正答率と無解答率(市、国、県比較)

	問題番号	正答率(%)			無解答率(%)			教科全体正答率		
		横須賀市	神奈川県(公立)	全国(公立)	横須賀市	神奈川県(公立)	全国(公立)	横須賀市	神奈川県(公立)	全国(公立)
小6国語	1二	21.5	25.6	26.7	9.4	8.3	7.1	63%	66%	67.2%
	2四	48.9	53.4	56.2	11.2	11.0	8.5			
	3二	62.0	65.5	70.2	19.2	19.3	14.3			
小6算数	1(3)	49.7	56.2	55.5	3.3	3.5	3.4	59%	63%	62.5%
	2(4)	15.7	23.3	20.8	5.5	4.9	4.0			
	3(2)	51.8	57.5	56.7	4.4	4.3	4.0			
	4(3)	50.7	54.3	56.2	17.4	16.0	13.8			
中3国語	1四	84.1	82.2	82.5	8.4	10.4	10.8	68%	70%	69.8%
	2四	65.0	65.7	67.5	3.3	3.8	3.9			
	3四	75.0	73.5	72.1	8.4	10.0	10.2			
	4三	52.2	51.2	50.0	17.8	19.8	20.7			
中3数学	6(2)	57.4	61.2	58.8	8.6	9.5	10.6	49%	52%	51.0%
	6(3)	38.2	43.2	40.9	25.4	23.5	24.7			
	7(2)	33.0	34.3	33.6	23.5	23.1	22.8			
	8(3)	39.5	42.0	42.8	13.9	14.0	13.2			
	9(1)	32.4	36.5	32.1	23.2	22.5	24.7	47%	50%	45.6%
中3英語	8(2)	21.9	23.7	19.5	26.0	26.7	29.3			
	10	7.6	10.0	7.4	19.9	19.3	21.4			

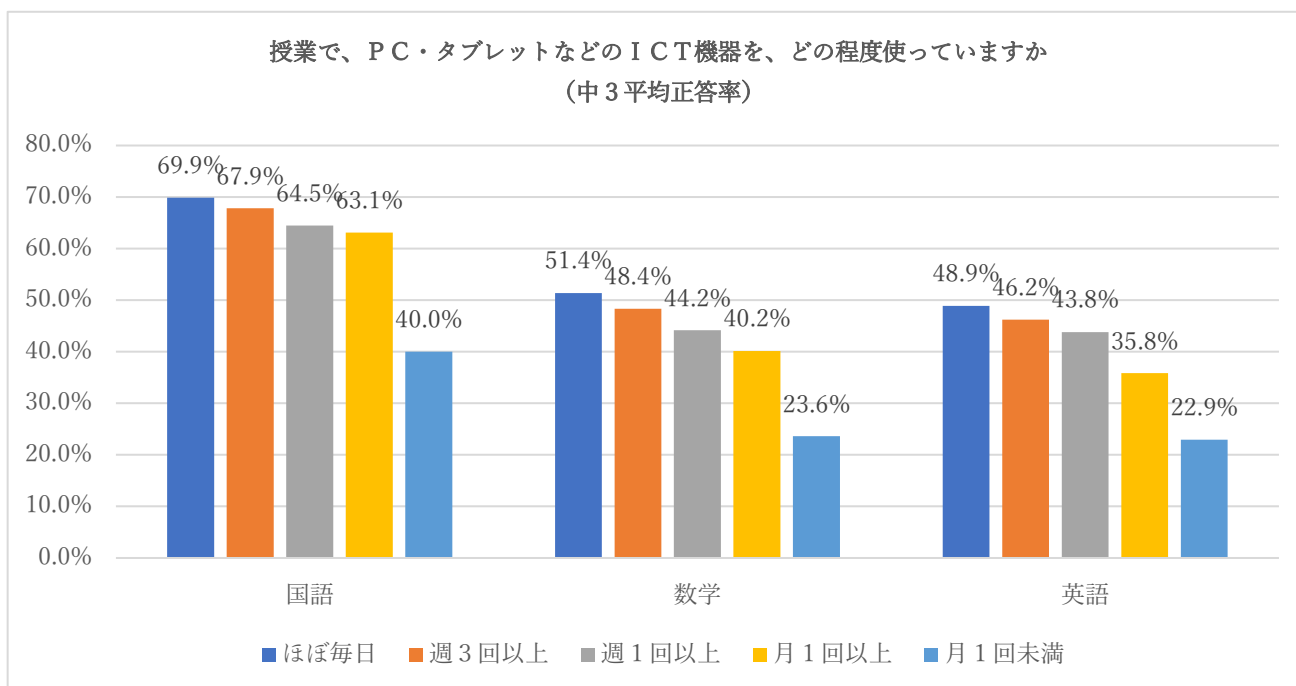
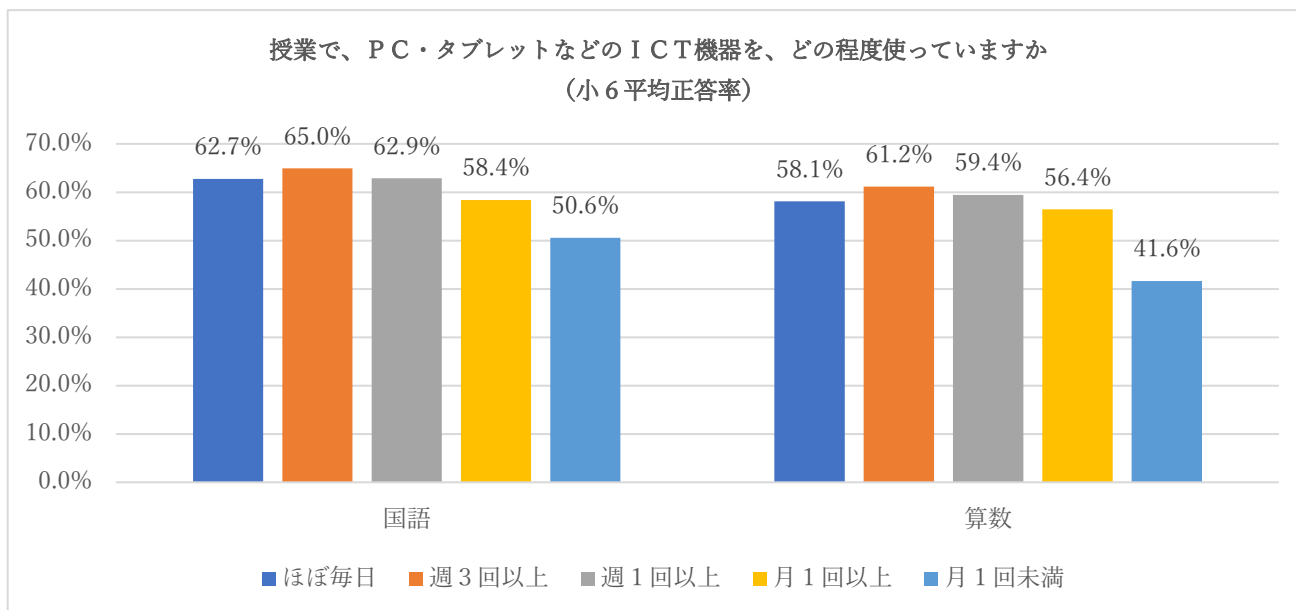
※全国正答率と比較して上回っている項目、また全国無解答率と比較して下回っているものに、色が付いている。

分析

- 「読書が好き」と回答している児童生徒の方が、記述式問題において平均正答率が高い傾向が見られる。
- 「主体的・対話的で深い学び」に取り組んでいると自覚している児童生徒の方が、記述式の問題において平均正答率が高い傾向が見られる。

2. 「ICT 機器を活用した学習状況」に係る分析

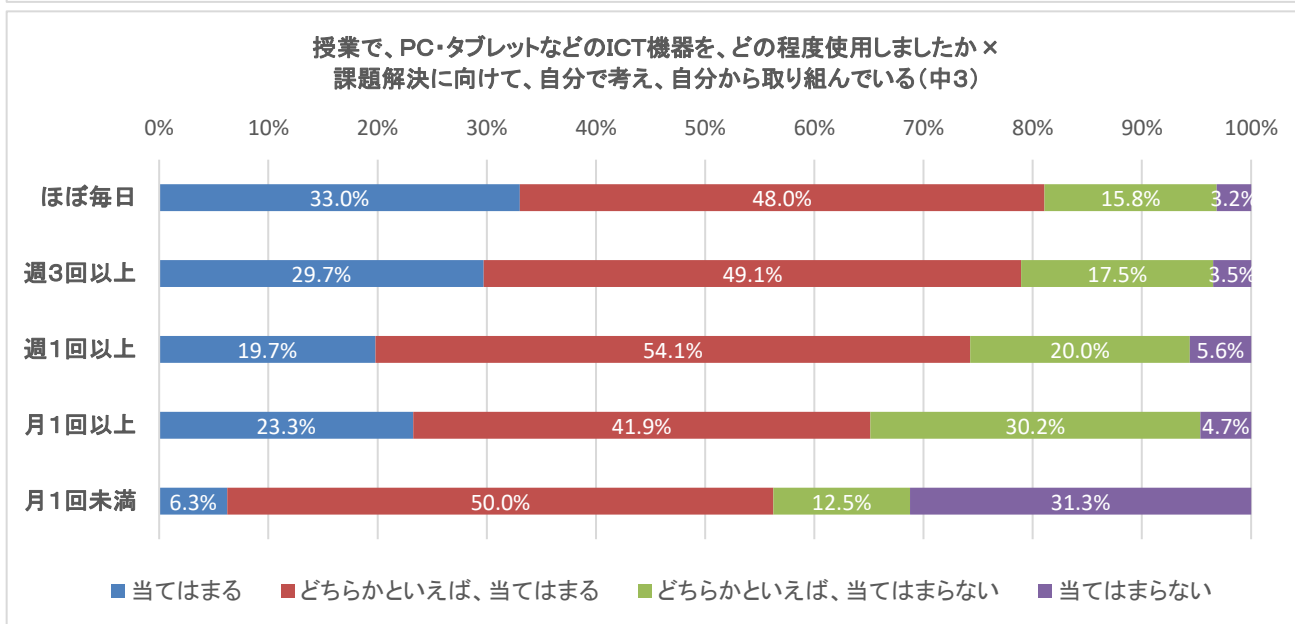
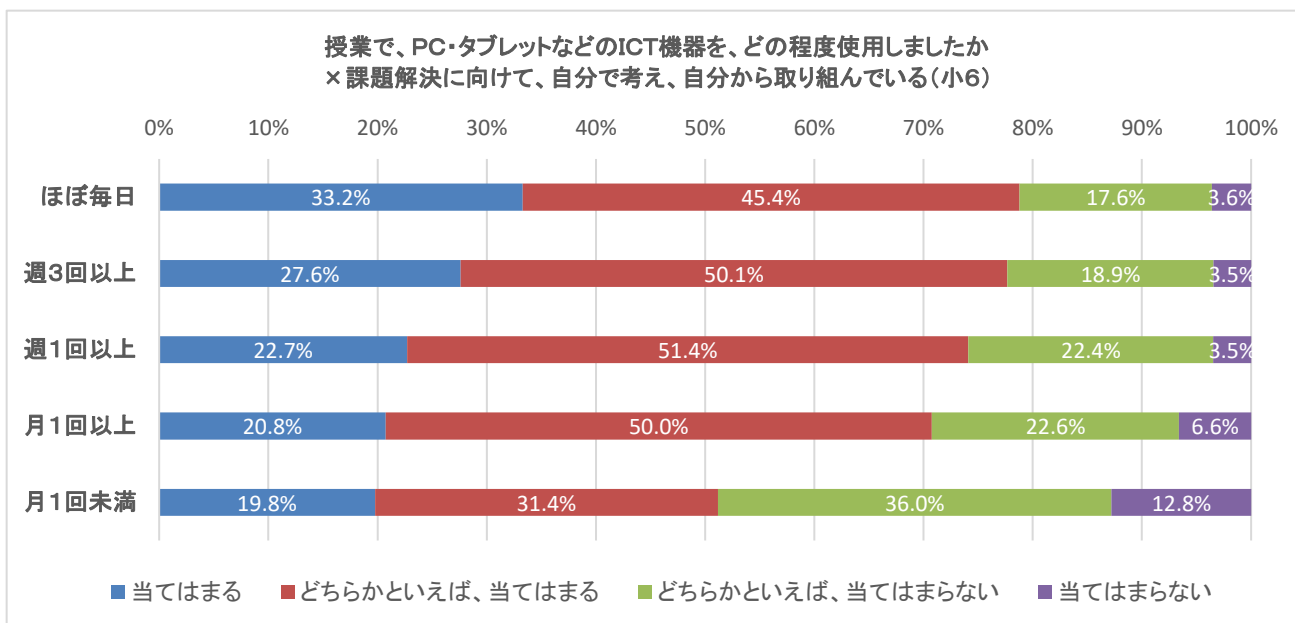
① [授業で、PC・タブレットなどの ICT 機器を、どの程度使用しましたか] × [各教科平均正答率]
【横須賀市の結果】



② [授業で、PC・タブレットなどの ICT 機器を、どの程度使用しましたか]

× [課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか]

【横須賀市の結果】



分析

- 中学校において、ICT 機器を活用している児童生徒の方が、平均正答率が高い傾向が見られる。
- ICT 機器を活用している頻度が高い児童生徒の方が、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる傾向が見られる。

3. 今後の取組

クロス集計の結果から、「主体的・対話的で深い学び」に取り組んでいると自覚している児童生徒の方が、平均正答率が高い傾向が見られました。各学校においては、自分たちで課題を設定し、仲間と試行錯誤しながら解決しようとするような、探究的で協働的な学習活動を計画的に設定する等の工夫が必要です。グループワークや話し合い活動をして終わりではなく、活動を通してわかったことや考えたこと等をきちんと言語化させることも重要です。横須賀市学力向上推進プランに記載している具体的な取組をさらに推進してまいります。

「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」と自覚することが、自己肯定感につながる可能性があることもわかりました。児童生徒が「自分にはよいところがある」と自覚する機会や経験が、自己肯定感につながります。授業を通して、子どもたちどうしで互いのよさを認め合う場面を設定したり、先生が児童生徒一人一人のよさを見取って認めたり、成長過程を見取って評価（言葉かけや、ノートへのコメント等）したりすることを今後も大切にしたいものです。

また、「読書が好き」であることや「主体的・対話的で深い学び」に取り組んでいると自覚している児童生徒の方が、記述する問題において平均正答率が高い傾向が見られました。また、ICT機器の活用においては、ICT機器を活用する頻度が高い児童生徒の方が、平均正答率が高く、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる傾向が見られました。授業改善に当たっては、学校司書と連携しながら学校図書館の資料を活用したり、目的を明確にしながらICT機器を活用したりするなど、探究的で協働的な学びを実現するための工夫が考えられます。今後も、学習改善を図るとともに各種施策を展開することにより、子どもの資質・能力の育成を図ってまいります。